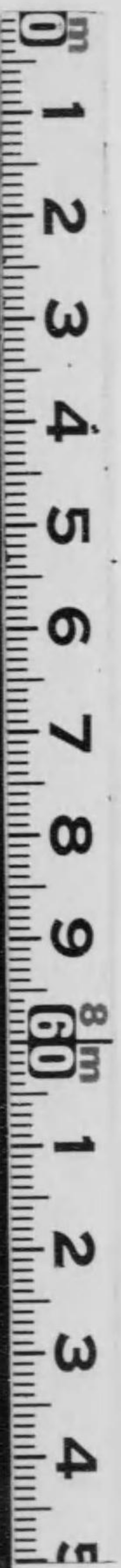


921.4
Mo45
(1) ⑦



始



2-392/

~~377-83~~

921.4
Mo45

921.4
Mo45
-(1)

(1)⑦



唐詩選評釋

文學博士 森 槐 南 著

東京 文會堂書店發行

上卷

大正
7.7.20
内交



唐詩選評釋

發凡

唐詩選は李于鱗の原本に非ず

李于鱗歷代の詩を編録し、代ごとに各體を以て之を分つ、古逸に始まり、次々に漢魏を以てし、南北朝に由つて以て唐に及び、唐以後には直に繼ぐに明を以てし、多く同時の諸人の作を録し、而して宋元の一詩に及ばず、名を命じて古今詩刪と云ふ、是より先き北地の李空同、唐以後の書を讀まずと云ふの說を倡へて海内靡然として風從す、于鱗等七子が代に至りて益、其の說を堅守し、同一の唐代にして又別つて初盛中晩の三期と爲し、初盛を正宗とし、大家とし、中晩以下を以て之を附庸の旁流と定め、宋元の二代は皆な棄て、顧みず、詩刪と曰ふものは蓋し大に刪述す

所あるの意なり、明末の坊賈乃ち右の詩刪中の唐詩に係るものを割て單行本とし附するに唐汝詢が唐詩解を以てし、又名を蔣一揆に托して之が注釋を加へ、別に其の名を立て、唐詩選と曰ふ、是れ即ち今の通行本なり、我が國護園の一派是の書を奉ずること拱壁も甞ならず、殆んど家経戸誦に近かく傳へて近世に至り、六如詩佛五山山陽等が力を極めて之を排斥したるに拘はらず、猶ほ初めて詩學に従事するものは先づ是の書を誦熟せざるは無し、而して其の實は詩刪中の一部に過ぎざるものなるを知るものは幾んど全く無しと云ふも可なるが如し、豈に奇事にあらずや、于鱗が門戶の見の僻謬なるは世已に定論あり、則ち是の書編録する所の詩其の家數に限りありて唐詩の風會變遷の由を知る能はざる亦固より然かり、然かり而して其の詩は仍ほ是れ唐人の詩、特に于鱗が手に編次せられたるを以ての故に讀むに足らずと謂は

い、則ち又俗に所謂の僧を悪くんで袈裟に及ぶものにして、同じく僻謬の見なりと云はざるべからざるなり、

唐詩選は于鱗の原本ならざるも亦于鱗の選なり

此の書縱然ひ坊賈が割取して別本と爲したるものなるも、古今詩刪中の一部分たるときは、則ち于鱗の手に成りしものなるや疑を容れず、之を僞選なりとは謂ふべからざるなり、吾が國通行の詩本にして、郷塾童蒙の習熟する所と爲るもの凡そ三種、曰はく三體詩、曰はく唐詩選、曰はく聯珠詩格、此の三書の是非優劣は姑らく之を置く、唯、三體詩は五七律及七言絶句の三體に限り、聯珠詩格は僅かに七言絶句の一體に局す、而して一は唐を選して所謂の初盛の代に及ばず、一は又多く宋代を録す、其の各體を通じて之を一部に收め、其の詩又多く李杜前後の大家名家を登載して、初學の必ず観ざるべからざるものを採録せるは、不完全

ながらも三書の比較上乃ち本書を推して上位に居るものなりと云はざるを得ず是れ余が今日初學の爲めに詩の津梁を示さんとするに際し其の平日に習熟して尤も入り易からしむるに便なるものを求め終に本書を評釋することゝなりたる所以なり

唐詩選評釋の本旨

唐の文學は詩を以て主とす詩を作んとする者は先づ唐より入手するを正則となせるは古今の通論たり若し其の淵源に涉りて之を治めんとせば三百篇離騷にして下漢魏六朝に至るまで先づ之を窮極し然か
る後唐に及ぶを順序とすれども之れ特に一家専門の學として之を修
むるものゝ爲にして言ふ詩の大概を知らんと欲せば惟唐則はち足れ
り何となれば唐に至つて始めて詩の各体を具備したればなり且つ唐
の詩亦何を嘗つて上風騷漢魏に溯游するの階梯たらざらん故に余茲

に姑らく唐詩選身を現して説法するに憚からず其の唐詩選身を以て得度すべきは初學者の何如に存す固より教を大方家に請ふが爲めに之を評釋せるにはあらず又決して于鱗七子が死灰を今日に燃やし徠南郭が餘毒を後世に流さんと欲するにもあらず余が眼中には唯其の詩の唐にして其書の披閱に易きの一事あるのみ山陽賴氏曰はく濟南選法本澶漫抉剔何須後手刊金篋不醫徠翁眼猶從五里霧中看と撰法より立論するときは則ち眞に此の如きものあり故に評釋の本旨を知らざるものは或は余を以て亦五里霧中の物と爲すものあるべし槐南何物にしてか又彼の炒豆を咬んで英雄を罵るの徠翁と譏を千古に同す豈に一快事にあらずや金篋果して世眼を醫するに足らば則ち又安んず余が言を河漢にせざるの知己なきを保せんや

唐詩選の序

通行唐詩選の首に序文一篇あり、是れ古今詩剛中唐詩の部の首に概要を綜論せる于鱗が緒言なり、其の言悖謬洵とに取るに足らず、然れども七子の徒が論詩の旨は全く此に外ならず、其の後來是非蜂起せるの由も亦全く是に存す、之を左に擧げて其の極めて乖戾なる所を指摘するも、未だ盡く無用の談にはあらざるべきなり

唐無五言古詩、而有其古詩、陳子昂以其古詩爲古詩、弗取也、

于鱗が意五言古詩は漢魏に起り六朝に止まる、唐には決して五古なし、唐の五古は自からは是れ唐の五古にして漢魏六朝の五言古詩にあらず、陳子昂の如きは其の感遇の詩、魏の阮嗣宗が詠懷に逼るものあり、是れ唐の五古を以て漢魏の五古を爲るもの、故に取らずと云ふにあり、然れども時代の變遷に依りて詩風の代降あるは一定の理にして唐に漢魏

の五言古詩なきは乃ち唐の唐たる所以、而して其の五言古詩たるに於ては則ち一のみ、唐無五言古詩而有其古詩とは譬へば白馬は馬に非ずと云ふが如く、故らに非理の奇語を爲して人を驚嚇せんとするに過ぎず、錢謙益の之を駁して果して然らば何んぞ魏に其の五言古詩あつて漢の五言古詩なく、晋に其の古詩あつて漢魏の五言古詩なしと云はざるやと謂ふもの、尤も痛快にして其の弊處に的中せり、然るに王阮亭は此を以て定論なりとし、錢謙益が上の一句唐無五言古詩を截取して于鱗が罪案と爲すは于鱗の受けざる所なりと云へり、余を以て之を觀れば、阮亭の説亦專はら下の一句而有其のみに就て之を取り上一句の何等の意味を有するものたるを問はざるものにして、以て錢が駁論に對して辯護の効力を有せざるものと信せり、錢は單に七子が門戸を破るを目的とす、其の一時の積弊を矯むるに於て洵とに功ありとす、王が時代

に至りては稍々復た格調に代ゆるに神韻を以てし、分門守戸の風を再揚せんとするの傾向あり、王が清秀于鱗の目ある亦此が爲めに、詩の流派を辨せんとするもの、知らざるべからざる所なり、

八

七言古詩、惟子美不失初唐氣格、而縱橫有之、太白縱橫、往往強弩之末、間雜長語、英雄欺人耳、

此の段の意蓋し七古は初唐に限る、猶ほ五古の唐以前に限るが如し、杜少陵のみは初唐の氣格を失はざれども、其の縱橫の處は之ありと云へば、即ち此の處初唐に似ず、之が病なりと云ふもの、如し、太白の縱橫は強弩の末にして取るに足らず、其の長語を雜ゆるは英雄の人を欺くのみと、夫れ初唐は原より七古の祖、李杜の兩家之に由つて而して變化して別に縱橫雄傑の作を成す、是れ李杜の千古に擅場なる處、單に初唐氣格を以て七古と爲し、李杜二家が擅場の處を以て病と爲すに至つて

は、奪理顛倒未だ是より甚しきものあらざ、干鱗此の種の處則はち所謂高言放論狂易風を成し、風雅の下流に淪し、聲偶の極弊に陥りし所以なり、

至如五七言絕句、實唐三百年一人、蓋以不用意得之、即太白亦不自知其所至、而工者顧失焉、

太白が不用意を以て之を得たるものは古今體皆な然かり、那んそ獨り五七言絕句に止まらんや、五七言絕句固より太白が擅長の處、然れども此を以て太白を概せば、太白亦今に傳へて詩仙の稱を安享する能はざるなり、工者顧失するものは古來の作者亦大抵此の如し、何んぞ又太白に限らんや、

五言律排律、諸家概多佳句、

能く肯綮に中れるものは、則ち此の兩句のみ

九

七言律體、諸家所難、王維季頎、頗臻其妙、即子美篇什、雖衆、憤焉自放矣、

王維李頎等が七律は品格を以て勝り遠韻を以て勝る、固より正宗たるに愧されども、少陵に至つては則ち宏才卓識、盛氣大力を以て之を遺る、秋興八首詠懷古跡五首諸將五首の如き、尤も横縦出沒にして氣脈動盪し、首尾渾成なり、直ちに斥けて憤焉自放と云ふ、豈に止夢中の吟嘆のみならずや、

作者自苦、亦惟天實生才不盡、後之君子乃茲集以盡

唐詩、而唐詩盡乎此、

一幅瞞人の言、此の一集を以て唐詩を盡くすと云ふ、其の大言笑ふ可きも、其の大膽愛すべきものあり、乃は公安に扶摘せられ、常熟に哂罵せられ、三四年を出でずして身に完膚なきに至るも、猶は能く我が國諺

園の徒を瞞過して死に抵るまで悟らしめず、終に以て徳川氏三百年間の風氣を開らき、詩運を興盛ならしむ、干鱗此の段亦英雄なる哉、一笑、

壬辰十月

槐南主人森大來偶拈

唐詩選評釋卷一

明 李攀龍 原本
日本 森大來 評釋



五言古詩
述懷

魏徵

中。原。還。逐。鹿。投。筆。事。戎。軒。縱。橫。計。不。就。慷。慨。志。猶。存。仗。策。謁
天。子。驅。馬。出。關。門。請。纓。繫。南。粵。憑。軾。下。東。藩。鬱。紆。陟。高。岫。出
沒。望。平。原。古。木。鳴。寒。鳥。空。山。啼。夜。猿。既。傷。千。里。目。還。驚。九。折
魂。豈。不。憚。艱。險。深。懷。國。士。恩。季。布。無。二。諾。侯。嬴。重。一。言。人。生
感。意。氣。功。名。誰。復。論。

有唐開國第一等の人物語を出す自然に同しからず讀む者其の氣象の自然として卓越なるを玩味せんと要す、微の李密に由つて終に唐に歸せしは蓋し縦横の計就らずして而かも慷慨の志仍は存せしが故のみ既に唐に歸して而して之か爲めに力を效し、山東の勁敵徐世績を説て之を降さんとし、身を挺して難に當り肯て辭せず、其の志や壯と謂ふべし、然れども此亦唯太宗の知遇に感ずるが爲めのみ、古來君臣の遇合風雲の際會以て興朝の基業を隆昌ならしむるもの畢竟人生感意氣の五字を出でず、此の意氣あつて始めて能く事を濟すべし、則はち然らずして専はら功名の爲めに起見せば、夜猿寒鳥慘悽の音、古木空山鬱紆の路、初めより未だ會つて灰心沮氣の具たらずんば、あらず、猶は何ん予纓を請ふて、粵王を繫ぎ軾に憑つて七十餘城を下すの勇を鼓するを得んや、此の詩字字血性中の語寸毫も假捏し得ず、

其の精神の注射する所亦全く此の五字に在るなり、
「豈不憚艱險、深懷國士恩、逆挑倒插、語氣此に一折して頓挫極りなし、全篇の氣格之を得て一振す、作法を以て云へば、上を承け下を起すものにして之を大開大闔の筆と謂ふ、長篇を作るものは其の五七言たるを論せず、必ず此の反挑の筆を用ゐんを要す、然らざれば一氣流下し平直にして尾大不振の病に陥るなり、

「既傷千里目、還驚九折魂、此れ亦倒插句法なり、本意に由れば千里既傷目、九折還驚魂と云ふを以て順當とす、然れども若し如是なるときは化して平板となり、凡俗となり、更に句を成さず、詩の酸鹹を識らんと要せば此等の處尤も意を注かざるべからざる所なるべし、
唐初の五古六朝卑弱の格を一變し、力どめて沈鬱頓挫の風を創す、此の詩の如き之が嚆矢と謂ふも妨げなし、是の時に當りて未だ所謂る

詩律なるものならず、故に其の聲調大に律詩に似たるものあり、縦横計不就以下十二句純然たる對語を用ひ、其の平仄も亦大抵今の律詩の式に偶中す、後來の律詩なるもの蓋し此の種の音節を取り約して八句どなせしなり、然れども律詩の躰既に定まりて、牢然抜くべからざるの今日に在つては、古詩を作る率ね律詩の音節を雜ゆるを忌む、斷として口を此等の作に藉き古詩律調を用ゆるも妨げなしと謂ふを得ず、是れ詩を論ずるもの、宜しく其の大局面を洞觀し、深かく風氣の變遷に鑒ひべくして、僅かに一方隅を見て、遽かに判斷を下すべからざる所以なり。

○感遇

張九齡

孤鴻海上來。池潢不敢顧。側見雙翠鳥。巢在三珠樹。矯矯珍木顛。得無金丸懼。美服患人指。高明逼神惡。今我游冥冥。弋

者何所慕

李林甫柔佞多狡の才を以て牛仙客を援引し、並に相位に居る。是に於て玄宗の明其の蔽ふ所と爲りて、而して九齡の賢亦終に放たる。感遇十二首皆な其の斥逐後の作くる所、大抵詩人比興の義に取り意を草木蟲魚の微に托して、李牛を諷諭する所以のもの、至らざる所なし。此の首尤微にして、顯れたるを覺ゆ、一樹の味に過ぎずと雖、以て全鼎を識るに難からざるなり、先づ詩の正面に就て之を釋し、次に側面より其の微旨の在る所を疏明せん。

孤鴻あり海上より來る、池潢の水敢て顧みる所にあらず、何予や、鴻は固より海上を以て家と爲す、其志江海の大に在るが故なり、誰れか圖らん池潢の側、忽ち兩箇の翡翠鳥の三花珠樹の上に巢ふて、揚々として自得せるあり、鴻見て竊かに之を危む、何となれば、美服を着する

ものは常ねに人に指目せらるゝことを患ふ彼の翠鳥毛羽鮮美寧ろ人目を惹かざるの理あらん況んや高明の位に在るものは必ず鬼神の妬悪を招く彼れ翠鳥の居る所を見るに則ち嬌々たる珍木の類にあらずや安んず金丸の懼なきを保することを得ん而して兩箇の翠鳥自から傲ひる所を知らず嬉然として其の上に游戲し自から樂ひものゝ如し憫むべきのみ我れ鴻の如きは之に異なり既に海上より來り又海上に向つて去る天空海潤の處翱翔して冥冥の中に入る則はち弋者ありと雖豈に我が後を追跡して以て之を捕捉することを得んやと是れ詩の正面の解なり

九齡自から孤鴻を况す孤の字雙の字に對して特に之を下せるものなれども暗に滿朝の燕雀一人の我が大志を知るものなきを寓して刺眼の極なり雙翠鳥は李林甫牛仙客に喩ふ彼れ等正に二公の位に

躋り氣焰天を薰す巢ふて三珠樹に在りとは此を謂ふなり彼等聖聰を蒙蔽し賢人を排擠し自から以て其の所を得たりと爲す然れども安んず惡貫已に滿盈して他人の其の後を伺ひ之を暗算するものあるを知らんや美服は人の指さんを思ふ彼の爲す所一として人目を側てしめざるは無きなり高明は神の惡みに逼る彼が位既に人臣を極む君子に在つても亦亢龍の悔を貽さるる少なし況んや李牛一輩の小人をや我れや既に池潢を顧みず爵録を視ること塵芥の如し是を以て江湖に放浪し逍遙自在唯吾が適を適とす我を中傷せんと欲するものあるも斷として手を下す能はず是れ豈に李牛輩が夢想の及ぶ所ならんやと是れ側面の義なり

通篇正喻夾寫讀者をして言外に其の意を領略せしむ九齡既に李牛の排擠する所と爲りて而かも一詞の之を怨排するなく唯其の滿盈

八
の戒を悟らずして漫に威福を弄し忌憚る所なきの愚を憫むのみ、
是れ温厚の旨なり。結語楊子雲が法言を用ゆ、唯法言は則ち鴻飛冥
冥弋者何纂に作る、或は言ふ此の篇慕の字當さに是れ纂の字の誤な
るべしと、然れども韻脚に合はず、九齡の原本は斷じて慕に作りたる
ものなるを知るべし、慕の字其の義に於て通せざるなし、必ずしも原
語に拘泥するを須むず、

時代を以てすれば九齡は宜しく陳子昂の後に在るべし、況んや九齡
が此作本と子昂が感遇の五古に擬して作りたるものなるをや、李于
鱗か意蓋し九齡は唐興つてより後房杜姚宋に繼ぐの賢宰相にして
其の人物負かに子昂の比に非ず、是を以て故らに其の序を換へて直
ちに魏徵に接す、推して魏徵以後の第一人と爲すの微意なり、子昂の
感遇實に阮籍が詠懷より出て、開天の風氣を開く、詩風代降を論ず

るもの、必ず讀まざるべからざるの大篇たり、干鱗乃ち陳子昂其
の古詩を以て古詩とす取らざるなりの一語を以て之を葬送し去る
放言高論龍蹠虎歩して其の陋是の如し、多く未だ自から分量を知ら
ざるに坐するのみ、

○薊丘覽古

陳子昂

南登碣石館。遙望黃金臺。丘陵盡喬木。昭王安在哉。霸圖悵
已矣。驅馬復歸來。

唐興つて文字仍は齊梁徐庾の餘風を承け豔冶流麗の体未だ一掃し
盡くす能はず、子昂が感遇三十六章出て、始めて變じて雅正に趨く、
其の功寔に偉なり、故に王阮亭の曰はく、魏晉の風骨を奪ひ梁陳の俳
優を變ずるは陳伯玉の力最も大、張九齡之に繼ぎ李太白亦之に繼ぐ
と薊丘覽古の一篇の如きは其の片鱗殘甲に過ぎず、于鱗の選する所

一〇
則はち此に止る、此を以て自から嚴正と稱す、人をして其の掛一漏萬に齒冷せしめざらんとするも得べからざるなり、然れども子昂の此篇果して覩るに足らざるかと謂へば、則ち又決して然らず、簡勁峭直語盡きて意盡ぎず、結二語感慨交々、臻り神情俱に遠し、夫れ昭王の霸圖を成す所以のものは、端に士を得たるに在り、而して今霸圖已矣、復た士を好む昭王其人の如きものを見る能はざるなり、則はち馬を驅つて復た歸らざるを得ざるの本意、筆端に隱躍して、身世寥落世に知己なきの一幅の痛涙あるを見る、其の筆を用ゆるは、起より一氣して「霸圖恨已矣」の句に至り、忽然波折を作して、抗墜して結と爲す、笛聲の破に入るが如く、驚歎に餘あり。

「丘陵盡喬木、昭王安在哉、蘇子瞻が所謂る固一世之雄也、而今安在哉」とは暗に此の篇より胚胎し來りしものゝ如し、頃ろ防刻唐詩選國字解

を見るに、丘陵の二字を解して昭王歌舞の地なりと謂ふ、僻陋笑ふべし、相傳ふ茲の書南郭の手に成ると子選、陋と雖も、恐らくは此の愚見を抱かず、影撰の人を誤る、少なからざるを見るなり、

○子夜吳歌
李白
長安一片月、萬戶擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、何日平胡虜、良人罷遠征。

太白天縱の才飄々乎として遺世獨立の想あり、詠者謂ふ其の雕章琢句に屑屑たらず、亦鑄心刻骨に勞勞たらず、自から天馬空に行き、獨勤すべからざるの勢ありと、此の言良とに然かり、願ふに其の長ずる處尤も古樂府に在り、蓋し才思横溢して發抒する所なく、輒はち此を借つて其の筆力を逞す、篇幅の短長、音節の高下、一も漢魏以來の古辭と合ふ所なくして、其の神理は、則はち純然たる古樂府の神理なり、時事

の明言する能はず若くは之を顯言するに忍ひざるもの、往々古樂府
題を以て隱に之を諷す、杜少陵が別に新題目を設けて時事を斥言す
と、寔に異曲にして同工なるものなり、子夜吳歌も亦樂府題の一、晋
に女子あり子夜と名づく、此の聲を作る甚だ哀なり、後人因て四時
行樂の詞を作り、子夜春歌子夜秋歌等の目あり、此の歌本と晋に始ま
りて名けて吳歌と云ふものは、子夜の歌聲の本づく所吳調にあり、吳
は本と雜曲にして江南に出づ、東晋以來稍増廣あり、其始め皆な徒
にして口に信せ節を合するのみ、既にして之を管絃に被らせ、箏
篋、琵琶、笙、等々の樂器を以て之を奏す、今太白亦其の音節に因り是の
詩を作る、故に題して子夜吳歌と曰ふ、太白が集を按ずるに原詩凡そ
四章あり、春夏秋冬を分詠して、各當時の事實に就き隱指する所あり、
此に選する所は則ち其の秋歌にして、當時玄宗皇帝が兵を邊境に

用ゐ萬民其堵に安んずる能はざるの苦楚を長安の思婦が情狀より
寫し出し、而かも又肯て怨悻せず、婉深の筆と稱するに足る、
呂氏が童蒙訓に太白の「曉月出天山、蒼茫雲海間、長風一萬里、吹度玉門
關」の句を賞して氣一世を蓋ふと謂ふ、本篇の「長安一片月」以下四句語
調神致俱ものに相類似す、太白が獨擅の技たり、萬戸の砧聲風吹き盡さ
ずと雖其の情は則ち「一片月の光普ねく大地を照らして敢て遮
蔽する所あるなし」總是「の」二字提し得て力あり、「何日平胡虜、良人罷遠
征」の二語、或は蛇足として之を刪除せるものあり、蓋し此の二句辭藻
上より論すれば稍や朴率に過ぎ、上文の神情縹緲たるに比しては大
に其の格を異にす之を削る固より理なきにはあらず、而して必ず之
を存せざる可からざるは詩を學ぶもの、首として講究すべきの一
問題に屬せり、

男女別れて相憶ふは是れ恒情のみ既に相憶ふて相見ることを得ず、
奈何ともすべきなきの境に到り、貞淫正邪の別此に判然として一の
鴻溝を劃す、此の一轉念の間は洵に人生の最大關頭に屬す、太白が寫
す所は貞にして正なる者に在り、而して起句より「總是玉關情」に至る
迄は、其詞如何に神妙なるも實は祇是れ所謂の恒情を寫すに過ぎず、
是に於て一步を進め、情を拆して性に入り、此婦の胸中只其の良人の
早やく敵を平げて遠征を罷めんことを祈るの外敢て他意あるなき
を明らかにす、其の筆を用ゆるの委婉深曲なる窮兵黷武を事とする
ものと雖之を讀まば勢ひ深かく自から省みざるを得ざらしむるの
妙あり、是れ詩は獨り辭藻才華を揆擿するに止まらず、必ずや此種の
質實なる理想を備へて始めて以て鬼神を感動するの域に到り得る
ものどす、太白が古風の第一篇に曰はく「興廢雖萬變、憲章亦已淪、自從

建安來、綺麗不足珍、聖代復元古、垂衣貴清真、
所謂の清真とは此を謂ふなり、唯此の清真あり、乃はち其の「大雅久不作、吾衰竟誰陳」と云ふ者、
誇誕の言に非ざるを知るなり、

○經下邳圯橋懷張子房

子房未虎嘯、破產不爲家、滄海得壯士、椎秦博浪沙、報韓雖
不成、天地皆振動、潛匿游下邳、豈曰非智勇、我來圯橋上、懷
古欽英風、唯見碧流水、曾無黃石公、嘆息此人去、蕭條徐泗
空。

太白の五言古詩樂府及び古風を除く外雄篇と稱すべきもの一にし
て足らず、于鱗樂府に於て僅かに子夜吳歌を取り、古詩に於て則はち
止々此の一篇を登す俱に皆な寥寥たる短篇、太白が萬一を悉くすに
足らず、然れども他の諸家に於ては録する所皆な一首に限る、獨り李

杜の兩家各二首を選択す。比較上、差々人意を強するものあり。此の篇「子房未虎嘯」劈頭の一句突如として人を驚かす。虎嘯の字殊に奇。颯下文「天地皆振動」の語史傳の原文を用ゆ。雖此の二字あるが爲めに筆勢飛動し精神百倍す。今人史事を詠す多く史傳の驅使する所とあり。涉筆輒はち拖泥帶水して皆な死句と成り寸毫の活氣を求めて得べからず。名人と雖往々此の病を犯せるを見る。是れ未だ太白が此種の作法に悟り到らざるが故なり。清の乾隆帝之を評して曰はく凜然たる英華の氣筆落ちて風雨を驚かすの語此れ之れに當るに足れりと呼一語眞に能く作者の精髓を穿てり。

「報韓雖不成。天地皆振動。潛匿游下邳。豈曰非智勇。句々兔起鶻落ち。反跌して勢を生ず。太史公が論贊と雖亦殆んど其の簡勁を譲らんと欲す。博浪の一椎天地振動。是れ他が勇なる處。秦大に索むる十日にして

獲す能く潛匿して終に異人に逢ふとを得たり。是れ他が智なる處。即ち千載の下親しく其の境を經安んぞ古を懷ふて其の英風を欽慕せざるを得んや。傳に稱す太白性倜儻縱橫の術を喜び任俠を事とし産業を治せず。其の神仙の道に特嗜あるに拘はらず亦功名を慕ひ建立して名を千春に垂るゝ所あらんを欲すと。此等の作を讀みて益々其の誣ざるを知るべし。
張子房あつて斯に黄石公あり。若し子房なくんは則ち所謂る黄石赤松皆な烏有子虛の流たらずんば。歎息此人去蕭條徐泗空。此人とは子房を指す。黄石公を謂ふに非ざるなり。蓋し此の篇本と子房を懷ふて作り兼ねて自己が抱負を抒ふ。黄石公が爲めに作るにあらず切に混視する勿れ。曾無黄石公の句は今其の人を見ざるの義なれども兼ねて又初めより其人なかりしの意を含くめるものと做して

讀むを可となす、

○後出塞

杜甫

朝進東門營。暮上河陽橋。落日照大旗。馬鳴風蕭蕭。平沙列萬幕。部伍各見招。中天懸明月。令嚴夜寂寥。悲筋數聲動。壯士慘不驕。借問大將誰。恐是霍嫖姚。

少陵の詩に於けるは今喋辨を須るず、其の五言古詩は則はち漢魏に憲章し材を六朝に取りて獨り境界を闢らく、王世貞が所謂る意を以て主と爲し、獨造を以て宗と爲し、奇拔沈雄を以て貴と爲すと、は寔に肯綮に中れるの言なり、前後出塞は杜が開天間の時局を慷慨せるの樂府辭にして高古沈摯空前絶後の作と稱す、其の命意の在る所は諸說聚訟し紛紛一ならず、雖虞山の錢謙蓋が箋疏殊に簡約にして詩意を獲たり、曰はく前出塞は秦隴の兵を徵して交河に趣くが爲めに

して作り後出塞は東都の兵を徵して薊門に赴くが爲めにして作る前は則はち主上武を好み兵を窮め邊を開く故に従軍苦樂の詞を以て之を言ひ、後は則はち安祿山の逆節漸やく萌し幽燕騒動して人主悟らず行く將さに陷没の禍を見んとす、故に征戍の者の辭を假りて以て之を譏切するなりと、此の數語以て之を悉くすに足るべし、唯前出塞は凡そ九首、後出塞は凡そ五首を以て組成し、猶は轉韻の古詩を讀むが如く、盡く之を讀破するに非ざるよりは作者の命意を領略する能はず、譬へば後出塞の本意已に前述の如くにして、征夫募に應じて薊門に赴き國家の爲めに力を致さんことを以て自から期したるに主將たる安祿山驕恣日に長じ、動もすれば僭上無君の舉動あるを見、若し猶は之に甘従するときは反賊の汚名を蒙らざるを得ざるに至らんことを懼れ、竟に陣營を亡命して故郷に逃れ歸るの一段全篇

の主眼たり、其事は叙して其の第四第五の兩詩に在り、然かるに茲に選する所は僅かに其の第二首一篇に止まれば、唯彼の征夫が始めて徴せられて河橋に宿營せる軍陣中に到り、其の卒伍の中に編入せられたる時の事實のみにして、斷じて所謂諷諭譏切の微意を發見すべきなし、若し其の詞彩の衆に勝れたるが爲めに單に之を選擇せしに過ぎすと謂はゞ、我れは于鱗が割製の非理なるを笑はざるを得ざるなり、

征夫既に募に應じて上東門外の營に赴き、此より一軍皆な裝を治して發し、薊門なる祿山が本營に行かんとす、落日將さに暮んとして河陽橋畔に到る、則ち此に駐劄して一夜を過こさんとす、故に萬幕を平沙に張りて、以て宿營の用に供す、是の時の兵士は皆な新募の者のみにして、軍中の紀律に未だ嫻はざる所あるが故に、各部伍毎どに順

を以て、主將の前に召出されて、其の訓示を受く、訓示既に置りて各、其の部に歸るも皆な大將の嚴訓を守りて少こしも喧嘩囂擾せるなく、靜營の爲に吹き鳴らせる筈聲の悲涼なるを聞く、毎に其の心益、慘然として肯て驕怠の念を懐く者なしと、軍容の靜肅にして紀律の嚴正なるを寫す、眞に身親しく其の境に到り、其狀を目撃せるの想あり、落日照大旗、馬鳴風蕭蕭、基く所は詩經の蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌の句に在りて、聲彩煥發化に入るの筆なり、不驕の上慘の一字を加ふ、尤も警峭之至人をして寒ならずして栗せしむ、霍嫺姚蓋し召募統軍の將を泛稱す、或は直ちに祿山を指すと解する者あり、是れ亦通ず、何んとなれば征夫等此際は未だ祿山に異志あるを知らず、唯其の英名を聞きて之を欽慕し、今や復た其の部伍に服して嚴肅の規律を守る、故に直ちに霍去病を以て之を比擬したるは、墜下の兵士が當さに有るべきの事

たればなり、後來其の僭妄の念あるを看破するに至つて始めて離心あり、河陽宿營の時は固より之を知るべきの理なきなり、然れとも作者に在つては未だ霍氏を以て、祿山に許す能はず、故に「恐是」の二字を冠し、故らに含糊不了の詞を成す、是れ後面に祿山が驕僭を述べんとするの襯染なり、單に此の詩に就きて其の不倫を疑ふは深かく詩を解せざるの言のみ、

李杜の代に至りては古今の躰漸やく已に區分したれば、古詩を作りて平韻を押するもの多く律調を帯びざらんことを力む、此の篇「合殿夜寂寥」恐是霍嫫姚の二語を除て餘は皆な律句を用ゐず、奉じて平韻到底を用ゐたる五古平仄の式と爲すに足れり、

玉華宮

溪。廻。松。風。長。蒼。鼠。竄。古。瓦。不。知。何。王。殿。遺。構。絕。壁。下。陰。房。鬼。

火。青。壞。道。哀。湍。瀉。萬。籟。眞。笙。竽。秋。色。正。蕭。灑。美。人。爲。黃。土。况。乃。粉。黛。假。當。時。侍。金。輿。故。物。獨。石。馬。憂。來。籍。草。坐。浩。歌。淚。盈。把。再。再。征。途。問。誰。是。長。年。者。

玉華宮は唐の太宗が貞觀二十一年に創建する所にして、土に文繪なく木に雕鏤せず、鋪首を矯むるに荆扉を以てし、綺窓を夔牖に變ずと云ふ、則ち其の結構の專はら質素に従ひしを知るに足れり、後ち廢して寺觀と爲る、少陵が此を過ぎて茲詩を賦したるは實に其の廢後に在るなり、起句より「秋色正蕭灑」に至る八句、其の荒涼の景況を直寫して、冷色幽光自然に人に逼る、宮明らかに太宗の創立に出で、而して「不知何王殿」と云ふ、本朝の舊物忽ち草萊に委す之を斥言するに忍びざるなり、萬籟笙竽の句起句に廻映し、秋色の句兼ねて時序を點出す、百忙中此の間筆を挿む筆に餘地あるを見るべし、「美人爲黄土」以下

結尾に到るの八句は跡を撫して慨を増す、約して之を言へば前半は是れ目に覩る所の景、後半は是れ心に感ずる所の情、斯の景あり則ち自然に斯の情あり、説者謂ふ、當時必ず隨輦の美人あり、歿して宮側に葬る故に此を借つて感を發すと、此當さに然るべし、當時侍金輿故物獨石馬三句一氣して連讀すべし、切に其の句を截斷すべからず、再は急促の意、征途の二字是れ少陵自から其の征途に在るを謂ふものなれども實は人生猶は逆旅のことしの義を兼該せるなり、溪山廻轉して忽ち松風の颯颯たるを聞く、蒼鼠あり人の來るに驚きて古瓦の間に竄伏す、此の句意を察するに玉華宮の瓦壞墜して地上に散在するを言ふ、其の荒廢の情狀想見るべし、鬼火陰房に青し其の人跡殆ど絶わたるを見る、壞道に哀湍瀉く昔日の行幸乃はち此の道よりす、今を撫し古を懷ふ感慨交集、音に黍離麥秀の悲のみならざる

ものあり、宮の荒廢如是にして秋色は依然瀟灑、太宗行幸の時と毫も異なるなし、况んや萬籟の蕭瑟たる宛然として當年笙竿の音を聞くが如きをや、是に於て筆を轉じて當時隨輦の美人上に到り因て以て逝者如斯の感を發す、接落法あり一唐突の筆なし、尤も宜しく法とすべきものなり、其人已に黄土則はち其の人を飾る所の粉黛の灰飛煙滅する固より其の所なり、獨り當時金輿に侍したるの故物として今に見るべきものは唯殿前の一無情の石馬あるのみ、再々たる征途の間、光陰猶は逆旅の如し、誰か是れ長年の者乎、此の馬獨り石たるを以ての故に現存す、人生の恃むに足らざる従つて知るべし、是れ藉草滯歌して盈把の痛涙自から抑止する能ざる所以なり、

○送別

王維

下馬飲君酒。問君何所之。君言不得意。歸臥南山陲。但去莫

復問。白雲無盡時。

二六

詩に根抵あり興會あり、二者概ね兼ねることを得べからず、李杜の兩家の如き一は出ずに沈鬱を以てし一は出ずに飄逸を以てす、其の趨向する所判然別途たりと雖、風騷に源し漢魏に沿し六代の菁華を萃めて別に一家を成す、要するに重んずる所俱に根底にあり、王摩詰は則ち然らず、陶淵明が一種の淵深樸茂純はら自然を以て宗と爲すものに學んで其の清腴の處を有し、妙品上上に位す、是れ天機の到る所已に然かり、洵とに學んで能くすべきものにあらず、山水に留連し風景を點染するの中、自から清旨微言を含有すること、一に滄浪嚴羽が所謂る空中の音相中の色水中の月鏡中の象言盡くるあつて意窮りなきもの、又司空圖が所謂る水中の鹽の如く味酸鹹の外に在りと云ふものに合契す、是れ興會の妙を得たるものなり、王阮亭常ねに杜

の五言古詩を目して變調と爲し、其の古詩選を編するに當つて終に杜の一詩を登せず、而して唐賢三昧集を選むに至つては則ち摩詰を取つて之が卷を壓す、蓋し渠が標舉して人に教ゆる所の神韻なるものは主とする所根抵にあらずして、興會に在り、若し律するに杜詩を以てするときは往々未だ背馳するを免かれずして、摩詰に於ては一も合はざるものなきを以てなり、余此の兩者の間に向つて優劣の論を置くを欲せず、唯詩たるに於て俱に必要欠くへからざるものなりと謂ふのみ、阮亭亦曾つて摩詰の詩を評して佛語と爲し、以て太白が仙少陵が聖に配す、三家鼎足の義、持平の論と稱すべし、此の詩亦寥寥數語然れども得意忘言の妙、實かに太白が「桃花流水杳然去、別有天地非人間」の上にあリ、但去莫復問、白雲無盡時、淵明の「採菊東籬下、悠然見南山」と同一の超詣あり、黃山谷云ふ詩を吟する多きを

二七

務むるを須るす、但意盡くれば則はち可なりと此種の處全く唯々神を以て之を會すべきのみ、

「君言不得意」但去莫復問」一問一答語意曲折す、杜が高三十五書記を送るの篇に「答云一書記所愧國士知人寔不易知更須慎其儀」と云へると其の神理相髣髴せり、其の通篇一律句を交へずして出句（韻を押し）第三字必ず仄落句（韻を押し）第三字必ず平、初學此等を取りて準則と爲せば晋節の諧叶を得るに於て庶くは其の正鵠を誤まるの虞なからん而已、

西山

常建

一。身。爲。輕。舟。落。日。西。山。際。常。隨。去。帆。影。遠。接。長。天。勢。物。象。歸。餘。清。林。巒。分。夕。麗。亭。亭。碧。流。暗。日。入。孤。霞。繼。洲。渚。遠。陰。映。湖。雲。尚。明。霽。林。昏。楚。色。來。岸。遠。荆。門。閉。至。夜。轉。清。迥。蕭。蕭。北。風。

厲。沙。邊。雁。鷺。泊。宿。處。兼。葭。蔽。圓。月。逗。前。浦。孤。琴。又。搖。曳。冷。然。夜。遂。深。白。露。沾。人。袂。

西山は古の楚の地に在り、故に詩中に楚色荆門等の語あり、此の篇之を李干鱗が主張せる所の選體に就きて其體製を審するときは則はち尤も謝靈運が游山覽勝の諸作に近く、從つて謝宣城鮑明遠が清俊の風味を包含せり、首に落日を點明し既にして日入り既にして夜既にして月出で既にして夜深かし、層次接落井井として條あり、而して其の寫景一複詞を見ず、此等即はち眞に有聲の畫たるに愧ざるものなり、尤も妙は則はち劈頭五字に在り、飄逸奇宕にして開口輒はち仙せんと欲す、全篇寫景平衡を旨とするが故に、其の起筆故らに此の逆勢を作して振作一番す、蓋し此に非ざれば通篇如何に清妙を極むと雖、未だ孱弱に淪陷するを免かれざるなり、其の本づく所は莊子の

汎汎として繫がざるの舟の如しと云へるに取約して一句と爲す、知らず落筆の際幾日思を経て始めて始許の妙語を着し得たるを常隨却帆影遠接長天勢此二句一方には一身爲輕舟の句に對して其の意を解釋し一方には落日西山際の句を承けて下文無數の景致を開き出す亦工と謂ふべし天地廓寥山水平遠則はち眼中の物象一として其の餘清に歸せざるは莫し是の一句蓋し概括して之を言ひ以下次第に之を抽象す林巒の夕麗を分つは日將さに沒せんとするなり亭々たる碧流の暗らきは日已に入りたればなり日已に入りて霞光猶は繼ぐ故に洲渚の遠き尙は陰映して見るべく湖雲亦明霽にして辨別すべし既にして暮色昏黒遙かに楚天の林抄より來り荆門の山岸遠くして終に見ぬざるに至れり荆門は山の名なり門に對して閉と謂ふは暮色の爲めに辨すべからざるを謂ふ開閉の義と稍々別混視す

べからず以上物象歸餘清の一句より逼出し暮景の清趣を細言す夜に入つては則はち如何と謂ふに暮景に比しては更らに清迥なり此の處故意に清の字を復して前の暮景に對峙せしめ更らに迥の一字を添へて夜景の岑寂を狀す鍊字の工夫是に於て最上一乗を得たり蕭蕭として風厲げし故に雁鷺皆な沙邊に向つて泊せんとす然かる所以の者は其の宿處に兼葭の掩蔽するありて風を避くるに宜しければなり措詞に順序ありて歩歩敢て散漫せざるを玩味せんを要す圓月逗前浦逗の字舊と多く止住の義と做して解するは大に非なり這は逗留の逗にあらざる則はち逗漏の逗なり國歌の「もれ出る月の影のさやけさ」とある「もれ出る」の義に同じ雁鷺既に宿して孤舟の一客猶は琴に倚りて其の韻を搖曳す明月の前浦に滿つるが爲めに其の光景に留連して返るを忘れたるなり忽にして衣襟冷令然たり始め

三二
て夜の遂に深けたるに心付けば白露袂を沾して清寒自から耐ゆべからず東坡が赤壁の賦末倚舷高歌不知東方之已白と謂へると同一の結法に屬せり、

傳に據れば常建頗る意を仕宦に得ず遂に琴酒に放浪し太白紫閣の諸峯に往來して肥遯の志あり嘗つて藥を仙谷中に採りしに一女子の遍體毛縁なるに逢ふ自から言ふ是れ秦の時の宮人にして亡けて山に入り松葉を食ひ遂に饑寒せずと因て建に其の微旨を授く建後ちに鄂渚に寓し王昌齡張債等を招きて同じく隠ると云ふ其の平生の人と爲り此の如し一身爲輕舟の語人間煙火を食ふもの肯て企及する所に非ざるや亦宜べなり、

○宋中

高適

梁王昔全盛賓客復多才悠悠一千年陳迹惟高臺寂寞向

秋草悲風千里來。

梁の孝王宋中の地を治め盛んに宮室の興こし大に賓客を會す今の汴梁即ち是れなり時に於て司馬相如鄒陽枚乘莊忌が徒競つて其の聘に應じ漢代の文學一時之を梁園に繋ぐの盛觀あり歌吹臺の如きは即ち其の尤も有名なる勝地にして降つて唐代に至り滄桑の變少ならずと雖臺の如きは仍ほ儼存したりと云ふ高適開元中に當りて汴州に遊び此に於て當時の詩家の巨擘たる李白杜甫の兩人と邂逅し酒に對し文を論じ契合極めて深かし其の酒酣には耳熱するの時乃ち相携へて彼の吹臺に登り慷慨悲歌し風に臨み古を懐ふ看るもの其の意を測かる能はず此の事實は當時殊に有名の話柄にして李杜の集中に散見するもの亦一再之に及べり蓋し適少うして拓落小節に拘はらず年五十にして殆めて詩を學ぶに天稟に得た

る所極めて厚くして語を出す即ち工に又氣質を以て自から高し胸臆間の語を吐露して矯飾に渉るものなし杜少陵之を飢鷹の未だ肉に飽かずして翅を側めて人に随つて飛ぶに喩ふ亦以て適が人と爲りを見るべし詩意は文義自から明晰にして曲解を待たず寂寞として秋草に向へば悲風千里より來る蓋し所謂の後の今を視る猶ほ今の古を視るがごとくなるべしとの意にして憑弔感喟涕泗の横流を覺えず正に曹孟徳が悲み中より來つて斷絶すべからずと云へると其の趨向を同らせり

此の篇命意造語俱に陳子昂が薊邱覽古と相髣髴す李于鱗が嗜好の在る所專はら此の種に存す兩首固より必傳の作にして雙美と稱するに足ると雖寥々十數篇を以て唐の詩を盡くさんとせるの選中に於て故らに其の相類似せるものを並へ擧ぐるは未だ自己れが好む

所に癖するの譏を免かれず于鱗の選大抵是の如し笑を千古に貽せる亦寔に已むを得ざるなり

與高適薛據同登慈恩寺浮圖 岑 參

塔勢如湧出孤高聳天宮登臨出世界磴道盤虛空突几壓神州崢嶸如鬼工四角礙白日七層摩蒼穹下窺指高鳥俯聽聞驚風連山若波濤奔走似朝東青松夾馳道宮觀何玲瓏秋色從西來蒼然滿關中五陵北原上萬古青濛濛淨理了可悟勝因夙所宗誓將挂冠去覺道資無窮

隨の無漏寺の故地唐の高宗太子たりしとき生母文德皇后の爲めに之を脩理して更らに一迦藍を建立す故に名けて慈恩寺と云ふ塔は則はち沙門玄奘が西天竺窣堵波の制度に倣ひて創建せし所なり岑嘉州杜甫高適薛據の諸人と同じく其の上に登り各吟詠の什あり是

れ、彼の、高常侍が李杜の二家と歌吹臺に登り詩を賦したるの事と同一の佳話にして頗る一時に喧傳したるものなり、顧ふに題中杜子美の事なし而して杜集中亦題して「同諸公登慈恩寺塔」とありて其の下に「時高適薛據先有此作」と自注したるのみ、亦岑が事に及ばず、蓋し高薛は當時此の浮圖に登り詩を賦するの主唱者にして、此游の東道たり、岑杜は之が客位に居りたるものなるを以て、互に其の主を擧げて云ひたるが故のみ、

岑參が詩は屬詞清尙にして用心良とに苦其の情を山水に放つに當りても常ねに逸念を懷き超拔孤秀にして常情に度越す、高常侍と風骨頗る相似て岑尤も發端に工なり、茲の篇塔勢如湧出孤高聳天宮の如き題目の正面に向つて突如として筆を起す句も亦殆んど湧出せるかと疑ふ、其の嘉州の凌雲寺に登る詩の起調寺出飛鳥外青峰戴朱

樓と云へると並に千古に冠絶す、杜少陵云ふ、岑參兄弟皆好奇と吾れ是等を誦して好奇の二字の確切にして易むべからざるものたるを知れり、登臨出世界より嶮崢如鬼工に至る、是れ其の湧出して天に聳ゆるの状を直寫し、四角礙白日より俯聽聞驚風に至る力を極めて之を形容せり、杜が同作の七星在北戸、河漢聲西流の二語に較ぶれば稍其の奇を輸するが如き觀あるも其の工力に至つては未だ遜する所あるを見ず、連山若波濤より萬古青濛濛に至る、是れ塔より望見る所の景なり、而して此の八句固より眼中の景を寫すと雖前四句は純然たる寫景、後四句は則ち景に由つて情に入るの端を作す、少こしく分別あり、淨理了可悟より末句に至る則ち胸中の感慨を寫す、純然たる寫情を以て一篇の結局と爲すなり、

塔は曲江池の側に在り、此に登つて望を聘するときは、長安の全都皆

な目の中に集まる、連山は腕蜒として帝闕に向へること猶ほ波濤の東海に朝宗するが如く、輦路馳道の間、青松兩行を夾み宮觀樓閣其の間に點綴して玲瓏として數ふべし、眞に帝都の宏壯なるを見るべし、此に於て筆を轉じて時序に入り蒼然たる秋色、今已に此の關中の地に滿つ、顧みて五陵北原の歴代帝王墳墓の地を瞻れば萬古唯艸樹の青して濛々たるを見るのみ、宮闕の壯彼の如く陵墓の寂寞此の如し、此に對して寧ろ百感胸に滿たざるを得んや、高常侍は曰く秋風昨夜至秦塞多清曠、千里何蒼蒼、丘陵鬱相望と杜少陵は曰はく秦山忽破碎、涇謂不可求、俯視但一氣、焉能辨皇州と是れ皆な同時の作、落筆して出す所各、同じからずと雖、言外に於て唐の盛運漸やく將さに衰頽に傾かんとするの兆象を言ふもの微にし、婉なるは則ち同じ、故に王阮亭三家を並べ稱して大將の旗鼓相當るが如く皆な萬人の敵なりと云

へり、適評と稱すべきなり、

「淨理」勝因皆な佛家の語、見る所の景既に自然に佛氏の盛者必衰の理に合す、佛の所謂勝因縁は夙とに作者が宗とする所にして今復た一切皆な空の清淨妙理を觀ずることを得たれば、即ち此の登臨に由つて大に無窮の覺道を開くに資益する所あり、厭世の念従つて生じて行々將さに官職を罷めて専ら禪理に參せんとす、故に「誓將掛冠去、覺道資無窮」と謂ふ、結局禪理を以て結ぶは、游寺登塔の作たるが故に題目の正意を完うしたるなり、

趙秋谷が聲調譜、此の篇を收めて一聯として是れ律調なるものなし、平韻の五古は此を以て標準と爲すべしと謂へり、蓋し五古の平仄此の比に至りて始めて完整したればなり、其中「突兀神州」は律句なれども下句拗句以て之を救ふに足り、且つ又律調に在つては斷じて

上句平聲の收字を用ゐたる例なきに由り妨げなきのみ、若し復た仄韻到底の古詩に至りては律詩原來仄韻を用ゆる事なし、故に律句を挿むを敢て病とするに足らざるなり、古詩の平仄は專はら平韻の爲めにして言ふ、律調を帯ばんことを避くるのみ、讀者記清せよ、

○幽居

韋應物

貴賤雖異等。出門皆有營。獨無外物牽。遂此幽居情。微雨夜來過。不知春草生。青山忽已曙。鳥雀繞舍鳴。時與道人偶。或隨樵者行。自當安蹇劣。誰謂薄世榮。

盛唐の詩陶淵明を祖述するもの、王摩詰之を前に唱へ孟浩無儲光羲之を中に應して而して韋蘇州實に之か後に殿たり、蘇州の詩冥心象外、清深雅麗、陶が冲和平澹の處に於て獨り其の神思を運す、司空表聖王弼と詩を論するの書に王右丞韋左司は趣味澄負にして清流の遠

を貫くが如しと云ふもの、洵とに允當の評たり、白樂天亦韋蘇州を推服し、以爲らく其の五言高雅閒澹にして自から一家の體を成す、今の筆を乘るもの誰れか能く之に及ばん、然れども蘇州の在時に當つては人亦未だ甚だ愛重せず、必ず身後を待つて然る後之を貴むと、其の詩亦云ふ、嘗愛陶彭澤、文思何高元、又惟韋蘇州、詩情亦清間、と、故に東坡の詩に、樂天長短三千首、却愛韋郎五字詩の語あり、其の前賢の賞識する所と爲る此の如し、幽居の一篇殊に高超の致あり、微雨夜來過、不知春草生、青山忽已曙、鳥雀繞舍鳴の四句、即ち又此の一篇の精彩の在る所たり、大略謝靈運が池塘生春草、園林變鳴禽の十字に胚胎し、更らに其の意理を精密ならしめたるものなれども、天籟悠然として情致暢茂す、幽居の神理、廿字以て之を悉くすに足れり、阮亭論詩に曰はく、風懷澄澹、推韋柳佳句多從五字求、解識無聲、絃指妙、柳州那得並蘇州と鳴

呼所謂の無聲絃指の妙とは此等の句を除て豈に他あらんや謂つて柳柳州が上にありとす意東坡の案を翻すにありと雖良とに亦詛言に非す起四句の意に據れば貴賤各々營求する所ありて我獨り外物の牽纏するなしと云ふ故らに世俗に背違して以て自から高ふするもの、如し故に末段之を解釋し是れ塞劣の天性に出で全く彼の徒らに厭世を事として榮利を鄙しとするにはあらざるの旨を辨す此等の觀念直に色相俱に空しきものにあらずんば造る能はざるなり、蘇州晚年自述の詩に少事武皇帝無頼恃恩私身作里中橫家藏亡命兒朝持栲蒲局暮竊東隣姬とあり此れに據れば其の人と爲り豪縱不羈にして頗る檢束せず然るに其の詩は神を古異に出し澹然として收むべからず殊に其の相類せざるを覺ゆ奇と謂ふべし彼の春風一曲杜韋娘の作の如きは杯酒の間時に少年の故態を見る此れ自から當

さに別に論べきのみ

南礪中題

柳宗元

秋氣集南礪獨遊亭午時回風一蕭瑟林景久參差始至若有得稍深遂忘疲羈禽響幽谷寒藻舞淪漪去國魂已遠懷人淚空垂孤生易爲感失路少所宜索莫竟何事徘徊祇自知誰爲後來者當與此心期

韋柳並稱す柳子厚は陶に學んで其の峻潔を得たるものなり蘇東坡歷代の詩を論じ而して謂ふ李杜の後詩人繼出す遠韻ありと雖才意に逮ばず獨り韋應物柳子厚の二家纖穠を簡古に發し至味を澹泊に寄す餘子の及ぶ所にあらずと又云はく子厚の詩は淵明の下韋蘇州の上にあり韓退之豪放奇險は則ち之に過ぎたれども温麗靖深は及ばず枯澹に貴む所は外枯れて中膏に淡に似て實は美なるに在

り。淵明子厚の流是れなりと、是れ直ちに柳州を以て淵明に配す、果して定論と爲すべきや否は遽かに決し難きものあれども、柳州の價直如何は以て窺知るべきなり、東坡又曾つて南礪の一篇を擧げ柳州の詩憂中に樂あり樂中に憂あり、蓋し古今に妙絶すと評せり、是の篇子厚柳州に左遷せられて後の作たれば憂悲憔悴の歎覺せず詞に見はる、而して始めて至りて得るある如く稍深して疲れたるを忘ると云ふ、斯れ憂中に樂あるなり、幽谷に響くの鳥聲元と應さに耳を悦ばしむべくして而して其の禽乃はち羈淪淪に舞ふの水影本と應さに目を樂しましむべくして而して其の藻乃はち寒斯れ樂中に憂あるなり、去國以下は淪落遷貶の恨復た遏抑すべからず、失路徘徊祇自から影を弔するのみ、此の心訴ふる所なくして徒らに後來の者を期す、抑何予語の沈痛にして酸楚なるや、蔡寬夫は曰はく、已れを関み志を傷

ましむるは君子の免かれざる所なれども亦何予如此の甚しきに至らん、柳州後ち卒ひに以つて憤死洵とに未だ理に達せざるが爲めなりと、此の評稍苛酷に似たりと雖、殊に其の病處に切中せるが如し、人を知り世を論するに於て廢すべからざるの説たり、

此の篇平韻到底にして多く律句を雜ゆ、蓋し初唐の風に源して排律を變じ稍其の語格を矯健ならしめたるものにして、古詩と云ふと雖、寔は半古半律の間に自から別に一體を做したるものなり、起結四句を除きて通篇皆な對語を用ゐたるを以て徵すべし、盛唐以後往々此の變體あり、詩の能事正さに拘泥せざるを以て長を見る然れども援して古詩律句を雜ゆべからずと云ふの反證と爲すを得ず、下の崔署の詩之に倣ふ、

早發交崖山還太室作

崔署

東林氣微白。寒鳥忽高翔。吾亦自茲去。北山歸草堂。杪冬正三五。日月遙相望。肅肅過潁上。臞臞辨夕陽。川冰生積雪。墅火出枯桑。獨往路難盡。窮陰人易傷。傷此無衣客。如何蒙雨霜。

署は開元の末進士に擧げられたるも仕官を事とせず去つて嵩山に隠れ太室少室の間に棲遲す是れ其の人高適岑參輩と同時に其の編次は則ち中唐柳宗元の下に在り是れ七言古詩中初唐の張若虛駱賓王等を李杜諸人の後に置きたる同一例にして顛倒の甚しき殊に解すべからず豈に崔は聲望稍韋柳に次ぐものなるを以ての故に故らに貶して下位に列したるか抑崔は白衣の山人にして他の諸人の皆な官職あるものと同じからざるを以て之を後にしたるか李于鱗始め布衣の士謝茂秦と深く相結托し後ち自己が官位漸やく

隆なるに及んでは茂秦を同列に置くを耻ち嘲りて杪君子と云ひ遂に排撃至らざるなきに至る其の炎涼勢利の念如此を見れば後者或は其の本意なるべし陋と謂はざらんと欲して得べからざるなり杪冬三五冬景正さに短かし朝たに宿鳥と共に東林を出で潁水に沿ふて行くこと終日夕陽臙々たるに及んで未だ北山の艸堂に至らず日短くして途長ければなり積雪四に満ちて河川爲めに氷る旋ち山墅の燈火の枯桑の間より隱見するあり二句冬景を狀し得て眞に逼る墅火一に野火に作る墅火の妙に如かず更に妙なるは枯桑の二字の夜景兼ねて仍は冬景を離れざるにあり獨往路難盡の一句前十句を總束して語勢此に一頓し以下は則ち折れて感慨に入る窮陰人易傷は人の常のみ尤も感傷すべきは則ち此の無衣の征客にして猶は雨霜の侵犯を蒙る眞に奈何と喚ばざるを得ず看る他の語氣一

層は一層より緊迫し來るを、
 于鱗五古の選此に止まる、則はち韓孟元古温李等は悉く之を自郛已
 下として一筆勾抹し去る、其の悖謬は論なく、即はち李杜の大家に就
 て之を言ふも李の古風指事深切言情篤摯にして風雅の嗣音詞人の
 冠冕を以て稱せられて、而して其の一だも選に入らず、杜の北征及赴
 奉先等の詩排天幹地の大文字たるの目ありて、而して亦録に著せず、
 僅かに其の方偶を舉げて遽に詫して唐の詩是に盡くと曰ふ、噫斯れ
 別に肺腸あり、于鱗真に妄人なる也哉。

唐詩選評釋卷二

明 李于鱗 原本
 日本 森大來 評釋

七言古詩

滕王閣

王勃

滕王高閣臨江渚、佩玉鳴鸞罷歌舞、畫棟朝飛南浦雲、珠簾
 暮捲西山雨、閒雲潭影日悠悠、物換星移幾度秋、閣中帝子
 今何在、檻外長江空自流。

王子安才思敏捷、其の卒する時年甫めて二十九にして、而して作る所
 の文字、則はち已に初唐四傑の冠たり、相傳ふ其の文詩を爲る甚だ精

五〇
思せず先づ墨數升を磨し然る後酣飲して被を引き面を覆ひ臥するもの數刻ならず起つて筆を擧て篇を成す一字を易はず時人之を腹稿と云ふと以て其の聰明絶世なりしを徴すべし其の沛王の府に在りしとき戯に鬪雞の楸を草し隱諷する所あり爲めに高宗の怒に觸れ斥逐せらる其の父も亦勃の故を以て交趾の令に左遷せられたれば子安住て之を省せんとし途次南昌を過ぐ會都督閻伯嶼新たに滕王閣を修して成る時正に重陽に届れるを以て大に客を閣中に會し其の婿に命じて序文を作らしめ以て坐客に誇る子安其の席末に在りて年最も少かし紙筆を請ひ立るに文一篇詩一首を作る二坐大に驚く閻も亦歎じて天才と謂ひ贈るに百練を以てす是れ此篇の本事なり其の文中に落霞與孤鶩齊飛秋水共長天一色の句あり此の詩書棟珠簾の二句と並に千古に艶誦する所たり

閣は唐の高祖が季子李元嬰の創建する所元嬰貞觀十三年に本地の都督に任じ滕王に封せらる故に此の名あり閻が重修の時を距る大約三十年物換り星移り長江空しく流る箇中無限の感慨全く神情を以て搖曳し出せり前半は是れ王が在時の閣後半は是れ閻が重修時の閣四句轉韻して今昔を分寫す節短かしく雖餘韻嬌々として盡きず有唐七古の開卷に置きて眞に愧なきものと謂ふべし
滕王高閣臨江渚一句是れ總提三四の二語は宜しく此の句の注脚と做して看るべし佩玉は是れ貴人の裝鳴鸞は是れ貴人の車書棟珠簾俱に王家富貴の氣象を脱せず而して其の間に朝飛暮捲する所のものは則ち南浦の雲西山の雨なり閣の高くして且つ江渚に臨める状態形容し得て盡くせりと謂ふべし尤も妙なるは朝暮の二字無意中に流光の箭駛にして遏止すべからざるの意を點し以て下の一段を

開拓し出せるにあり、地誌に據るときは南浦西山皆な寔に其の地あり、亦泛然として提起せるにはあらず、

「開雲潭影日悠悠」以下閣外の景物を以て別に筆を起す、前の浦雲山雨と相蒙るが如く相蒙らざるが如く、而して其の線索は則ち上文朝暮の二字より暗脈を引く、「日悠悠」の三字朝飛暮捲と相緊接して一種異様の結構を成せり、閣は仍ほ重修すべくして帝子は則ち再び見るへからず、欄外の長江は流れて千年を経るも休過のときあるなし、「空」の一字無窮憑弔の神理を傳出す、妙言外に在り、

此の篇四句を以て韻を轉じ、韻脚亦平仄相間ゆ、轉韻の正式たり、而して其の音律は純然後世律詩の蹊徑を開く、畫棟の一聯之を律詩中に挟むも亦宛轉として誦すべし、是れ所謂る初唐の體なり、然れども其の中亦天然の音節ありて句法之が爲めに活動し、平板に陥らざる處あり、即ち「南浦雲」の「南」の字、空自流」の「空」の字皆な平聲を用ひたること、是なり、後來杜韓の諸公古詩平韻を押する必ず其の第五字に平聲を用ひて以て語格を矯健ならしむるは亦是等を祖とせるなり、

長安古意

盧照鄰

長安大道連狹斜、青牛白馬七香車、玉輦縱橫過主第、金鞍絡繹向侯家、龍銜寶蓋承朝日、鳳吐流蘇帶晚霞、百丈游絲爭繞樹、一群嬌鳥共啼花、啼花戲蝶千門側、碧樹銀臺萬種色、複道交窗作合歡、雙闕連臺垂鳳翼、梁家畫閣天中起、漢帝金莖雲外直、樓前相望不相知、陌上相逢詎相識、借問吹簫向紫煙、曾經學舞度芳年、得成比目何辭死、願作鴛鴦不羨仙、比目鴛鴦真可羨、雙去雙來君不見、生憎帳額繡孤鸞、好取門簾帖雙燕、雙燕雙飛繞畫梁、羅帷翠被鬱金香、片片

行雲著蟬鬢。纖纖初月上。鴉黃鴉黃粉。白車中出。含嬌含態。情非一。妖童寶馬鐵連錢。娼婦盤龍金屈膝。御史府中烏夜啼。廷尉門前雀欲栖。隱隱朱城臨玉道。遙遙翠幃沒金堤。挾彈飛鷹杜陵北。探丸借客渭橋西。俱邀俠客芙蓉劍。共宿娼家桃李蹊。娼家日暮紫羅裙。清歌一轉口氣氲。北堂夜夜人如月。南陌朝朝騎似雲。南陌北堂連北里。五劇三條控三市。弱柳青槐拂地垂。佳氣紅塵暗天起。漢代金吾千騎來。翡翠屠蘇鸚鵡杯。羅襦寶帶爲君解。燕歌趙舞爲君開。別有豪華稱將相。轉日回天不相讓。意氣由來排灌夫。專權判不容蕭相。專權意氣本豪雄。青虬紫燕坐生風。自言歌舞長千載。自謂驕奢凌五公。節物風光不相待。桑田碧海須臾改。昔時金階白玉堂。只今唯見青松在。寂寂寥寥楊子居。年年歲歲一。

床書獨有南山桂花發。飛來飛去襲人裾。

唐漢の西京を以て首都となし、宮闕を増飾し、寺觀を創建し、市街康莊四通八達、則ち樓臺池館園囿の盛、亦窮侈極麗ならざるは、莫く、其の輪奐の美、良かに、漢代に超へたり。漢の時に當りて、班孟堅始めて兩都の賦を作り、盛んに其の昌明隆盛の風概を臚陳して、隱に其の窮奢を諷じたるより、張衡左思が徒競ふて其の體に倣ひ、左思が如きは殆んを畢生の心血を殫くして以て之に従事するに至れり、蓋し當時の詩は必ず五言に限る、五言は詠懷に宜しくして、叙事に宜しからず、且つ音短節促にして、勢ひ鋪陳に難し、賦なるものは之に異なり、古詩の流なりと曰ふと雖、半は楚騷の體より出で、長短參差縱橫自在にして、以て一代の制度文物を詳密に鋪叙するに餘あるものなり、故に漢魏より以て六朝に至るの文人才士皆な全力を揮ふて作賦に沈浸し、當代

の文學は殆んど詩に在らずして賦に在るの觀を呈したり、降て唐の初に至りては賦も亦漸やく已に陳腐に屬す、是に於てか陳隋間に濫觴せる七字の體を取り五言の簡核なるものに換へ、創して七言古體と爲し、以て遙かに彼の賦の餘流に接せんとす、是れ初唐七古長篇の盛に起りたる所以にして七古長篇は實に當時に在りては輒はち詩を以て賦を兼ねるの新體詩たりしなり、是を以て盧駱の流争ふて當時長安壯麗の景象を賦して此の新體詩中に入れ、班固左思等が作賦の意を取りて而して大に其の局面を一變せんことを圖る、是れ唐の文學が直ちに漢魏以來の詞賦を一掃して詩を以て其の焦點と爲したる根本なり、茲の篇を題して「長安古意」と云ふものは詩中の事物肯て當時を斥言せずして漢朝の故事を影借したるに由ると雖又一方には新體を以て古賦を作くりたるものなれば其の新體なるに對して

故らに古意の二字を標置したるものなり、則はち此の篇を目して直ちに唐の西都の賦なりと謂ふ亦妨けなきなり。

冒頭の一句「長安大道連狹斜」は是れ全篇の大綱領にして以下五百六十五言の文字は盡く皆な此の七字中より抽釋し出したるものなり、段落を分ち章回を剖つは眞に詩を解するものゝ爲すを屑とせざる所なれども、此の篇特に過長にして眉目淆亂の患なきに非ざれば暫らく初學者の爲めに之を分解して以て頭緒を尋ぬるに便ならしめんとす、此の詩蓋し分つて二大段とす、冒頭より起つて「妖童寶馬鐵連錢、娼婦盤龍金屈膝」に至る、是れ一大段、主第侯家より説て途中來往の男女に及ぶ、皆な所謂大道の盛を寫すものなり、御史府中烏夜啼より起つて結末に至る、是れ一大段、法官警吏の寂寞なるより説て倡家の夜景に及び其賓客の意氣揚揚たるより盛者必衰の觀念に入り作

者自家が長安の場末に寓して寂寥獨居の狀に至りて止む。是れ即ち所謂の狹斜の光景を寫せるものなり。其の間又無數の小段落を分ち千廻萬轉左旋右縈して仍は長安大道連狹斜の七字中に繳還す。神化不測の作と謂はざるべけんや。俗に花柳の地を指して狹斜と曰ふ。是れ倡家は多く小巷中に在るを以て云ふのみ。然れども單に狹斜と云ふは即ち狹隘の小巷の義にして固より獨り倡家を指して云ふのみならず。本篇の如きも宜しく其の意義を廣く取りて獨り倡家に黏住せざるを可とす。

長安都城の繁華なる大道狹斜相連り其の間の人馬肩摩轂擊して來往繼るが如し。試みに其の最も壯觀美麗なるものを擧げんに青牛を車に服して行くにあり。白馬に乗じて行くあり。車の中又殊に目を驚かすは七種の香木を聚めて以て車箱を飾れるあり。車上多くは是

れ女伴馬上皆な是れ公子女伴は則ち玉輦縦横として公主の第を過ぎ公子は則ち金鞍絡繹として列侯の家に向ふ。其の馬上の公子を蔭護する所以のもの即ち龍頭の寶蓋の朝日を承けて耀灼たるあり。車中の女伴を遮蔽する所以のもの即ち絲繡の鳳凰口より金絲の流蘇を吐て以て晚霞に相映帶するあり。曰はく朝日曰はく晚霞。明らかに此の種の車馬の朝より暮に至るまで往來絶えざるを點出するなり。車馬の頻繁なる如是なれば其の至る所の主第侯家の鬧熱なる従つて知るべし。侯家は則ち百丈の遊絲争ふて樹を繞れり。以て公子賓客の盛醺を推すに足る。主第は則ち一群の嬌鳥共に花に啼けり。以て女伴嬋娟の語笑を測るに足る。此の二句只景語を作りて肯て之を實寫せざるは本篇の体裁唯外面よりの觀察に止まり其の内部に一筆を侵入せしめざるに在ればなり。(以上第一小段)

六〇
「啼花戲蝶千門側」啼花の二字前段の語尾を承けて以て下文を開く之を蟬聯格と云ひ初唐諸公の慣手段たり尤も妙は字は前文を承くると雖意は則ち全く之と反するに在り即ち此の處の啼花の如き前段には借つて以て女伴の語笑を形容せるも此の段に至りては則ち別に他の蝶と相對比し以て一般の游人を形容せるか如き是れなり又「啼花戲蝶」の四字互省の法を用ゐたるも頗る奇と謂はざるを得ず蓋し本來は花に啼くの鳥花に戯るゝの蝶と言ふべきを上二字に於て鳥を畧し去り下二字に於て花を省き去る是れ互省法なり後人之を知らず遂に啼花の二字を改めて游蜂と爲せるは大に非なり主第侯家權門貴戚千門萬戸の間亂囀の鳥を聽き亂舞の蝶を見る游人の盛なる一に此の如し是れ多く碧樹銀臺の萬種の香色を慕ひて此に屯集し來りし故なるべし洵とに此の種の邸宅の結構壯麗なる復

六二
「遊」の長廊を架し其の左右互ひ違ひに窓眼を嵌入す之を交窓と謂ひ又合歡と稱す相對するを云ふなり雙闕の門樓には鳳形の瓦甍を連らねて翩然として其の翼を垂るゝが如し中に就きて尤も人目を惹く所のものは漢の將軍梁冀が畫閣の巍然として天中に聳起し漢の武帝が承露の金莖の突如として雲外に直立せる是なり然れば游人の麇集せるは更らに恠むに足らざれども所謂「樓前相望不相知陌上相逢詎相識」千人中竟に一人の面を識るものあるなし京師の廣き一に以て此に至る殊に歎駭すべきなり（以上第一小段）以上兩小段前小段は車馬より説き入り甲第の盛に及びて一頓し後小段は甲第の盛より説き入り游人の繁に及びて一項す章法錯綜變化極りなし梁家漢帝皆な漢代の故事を用ゐたるは當時の奢侈を斥言するに忍びざるに出づ所謂「溫柔敦厚の旨なり」字句皆な偉麗に

して音調亦鏗鏘たれば、讀む者之が爲めに氣を奪はれ、往々其の意の在る所を知るに苦るしむ、善讀の者は須らく仔細に之を咀嚼して、其の灰中の線草裏の蛇を一眼に觀定すべし、然かるときは靡々千言と雖亦破竹の如きのみ、

車馬游人の盛と王侯邸第の壯とは上文已に盡く、借問吹簫向紫煙以下は特に其の一部分の事實に就き、漸やく諷刺に入るの端を發す、一部分の事實とは即ち當時掖庭宮闈の妃嬪王侯貴戚の深閨淫風盛んに行はれて動もすれば白日公然車を大道に馳せ、年少美貌の男子を勾引し、殆んど彼の娼婦妓女と一般の行爲ありし事是なり、本篇の體裁既に前述の如く都て客觀的に外部より着筆したれば、今此の事實を寫さんとするに際し、仍は前段の語尾を承け、陌上相逢ふて相識らざるの游人、迥かに簫聲の高樓に起るを聞きて、互に相問答するの

語を頭緒と爲したり、故に借問云云と曰ふ、

紫煙縹緲の樓閣、是れ即ち彼の王侯公主が邸宅の一なり、中に當つて吹簫の聲の嚙啞たるを聞く、游人顧みて指點し、借問す、是れ何人乎や、曰はく曾つて舞を學んで芳年を度りし、貴女のみ、夫れ貴女にして、而して舞を學んで芳年を度る、是れ彼の賤妓と異ならず、其の不端なる知るべし、風俗の壞既に言外に見えたり、此輩の境遇已に驕奢逸樂を極盡し、唯美貌風流の男子を得て之と干飛の樂を盡くさんことを希望するの外、其の心中敢て他念あることなし、故に比目の魚どなり、鴛鴦の鳥ど爲るを得ば、死と雖も辭せず、仙と雖も羨まざるなり、夫れ比目鴛鴦の雙去、雙來して寸時も離るゝことなきの洵とに羨ひべきは衆の共に認むる所にして、固より此の輩を恠しまざるなり、然れども其の帳額に孤鸞を繡へるを見て、閨房中に獨處することを嫌ひ、

門簾に雙燕を帖するを愛好して常ねに門を出で、嬉游淫佚を恣ま
 いにす。是れ則はち大に訓とすべからざるなり。雙去雙來君不見の下
 三字は宜しく「君見すや」と讀むべし。或は「君見へず」と訓して以て「比目
 鴛鴦皆な雙去雙來せるに我が郎君は則はち獨り見へず」の義と解釋
 せるあり。義に於て大謬なしと雖、語勢よりするときは斷じて反語と
 爲すを善しとす。帳額に繡ふ所の鸞乃はち孤而して之を生憎す。明ら
 かに房帷に郎なく獨り此に閉處せるを嫌へるなり。門簾に帖する所
 の燕偶、雙而して之を好取す。門前に出づれば則はち郎あり故に之を
 愛好するの意なり。門簾防刻本多く開簾に作る、知らず此の二句本と
 對話に屬す。帳額門簾正に相配儷す。若し開簾に作くれば則ち句法散
 漫す。故に原集に就きて之を改む所謂「雙燕は簾子に縫付けたる燕
 形の繡紋を謂ふ、好取の取は助語辭にして別に意義なし、(以上第一大段
 中ノ第三小段)

「雙燕雙飛繞書梁」雙燕の字仍は前段を承く、而して前段の雙燕は門簾
 に繡せる紋繪のみ、此段の雙燕は則はち眞の雙燕を指稱して以て彼
 の貴女が春心之が爲めに惹動せらるゝの狀を興するなり。蟬聯變換
 の法是に至つて其の妙を極む。我れ昔し此の體に倣ひて岐阜燈歌を
 作る、其の一段の尾に云はく「那須更復城安土由來風水似平安」と是れ
 岐阜を謂ふなり、而して之に接して云はく「平安一夕嗟鼎沸倉皇變起
 本能寺」と是れ京師を謂ふなり、當時評するもの以爲らく、前の平安は
 岐阜を指し、後の平安京師を指すとせば、其の間大に分解を費し、語意
 爲めに了々たらずと、這の箇の門外漢、全く初唐に此等承接の妙法あ
 るを知らざるなり。其の事要緊に關せずと雖、聊か録して以て笑柄に
 資し、並せて詩法の變化の理を喻らしむ、

門邊果して眞の雙燕あり、雙飛して書梁の間を繞る、彼の羅帷翠被の

六六
中に爵金の香を薫じて座臥するの貴女之を見て寧ろ情を動かさ
らんや。則はち出游して冶游の郎君と相調笑せんとするの念自から
禁ずる能はず。竟に起ちて鏡臺に向ひ先づ其の髪を疏洗すると一番
所謂片片たる行雲蟬髻に着くなり。整髻已に異りて其の眉を畫く所
謂る縫織たる初月鴉黃に上るなり。鴉黃とは額上に黃粉を塗りて以
て飾りとせるの名にして唐時盛んに行はれたる婦人の粧樣なり。織
々初月已に以て織眉の狀を形容し兼ねて日將さに暮れんとする景
を寫す。語意雙關にして着筆靈妙。貴女疏粧既に罷む時正さに黃昏な
らんとす。則はち竊かに車に乗じて門を出で大道の上を徘徊す。其の
意笑を買ひ媚を炫するにあれば復た遮蔽するを須るす。粉白の臉。鴉
黃の額。嬌を含み態を含んで車中より出で其の情一にあらず。或は妖
童の寶馬の黒毛鐵色しにて。連錢の斑紋あるものに着目し之を誘ふ

て。歡を求むるあり。或は娼婦が盤龍の髻に擬し上に屈膝の金釵を挿
みて人の愛を買はんことを試むるものあり。嗚呼。彼等は皆な掖庭の
宮娥王侯の貴女なり。而して女子中尤も賤しむべきの娼婦の態を作
し。男子中尤も賤しむべきの妖童を誘ふて姪逸を圖る。傷風頽俗未だ
此より甚しき者あらず。然かも亦長安大道の上に於て比々として此
の恠事を見る。是れ詩人が其の狀を暴露して諷刺するに止む能はざ
る所以なり。妖童寶馬鐵連錢。娼婦盤龍金屈膝。此の二句説く者或は只
街上に往來せる妖童と娼婦とを泛叙するに止まるとす。知らず實は
是れ彼の貴女の行爲を活寫せる者にして其の傲ふ所は娼婦其の誘
ふ所は妖童の類たるを明點して故らに之を醜かしめたるものなる
を粉墨の春秋とは蓋し此等を謂ふ疎心の者漫然として讀過す。豈に
作者の深意を知らんや。(以上第一小段 中ノ第四小段)

長安大道の光景、貴女が私行の狀を寫すに至つて其觀止む、是に於て筆を轉して狹斜の情狀を寫し歎すべく哭すべきもの更に此より甚しきものあるを表明せんとす、則ち第一大段は此に畢り、茲より漸やく第二大段の發端と爲るなり、然れども其の意相申下せずんば何を以てか連して一首の詩を爲さん、故に第二大段の首は御史廷尉が第宅の光景より始まる、御史廷尉等の官は則ち第一大段に於ける彼の貴女等が醜行を取締りて風紀を維持すべきの責任あるものなるを以てなり、

御史執法の官を見よ、其府中には烏夜啼くにあらずや、廷尉警司の吏を見よ、其の門前には雀栖まんと欲するに非ずや、是れ豈に眞に太平世界蕩々たる乾坤果して法に觸れ罪を犯すものなきに由つて寂寞たる如是か、否否決して然らず、是れ當時の綱紀弛廢し百官解體し執

法警察を事とせるものと雖皆な其の職を曠して肯て顧る所なきを徵するに外ならざるのみ、是を以て太陽一たび西し玉道に臨めるの朱城隱々として辨すべからざるの時に際し翠轡の車を驅り遙々として遠く郭外に出で金堤の間に滅没せるもの甚だ夥多なるを見る禁を犯して娼に宿するもの多きを謂ふなり、甚しきは則ち杜陵の北渭橋の西、或は彈を挟み鷹を飛ばして危険を憚からず、或は丸を探り客に借して人を殺すに至るも、終に一人の其の不法を咎むるものなし、只此等游俠無頼の少年各芙蓉の劍を佩びて笑て相邀へ、終に相携ひて娼家に宿するを見るのみ、古へ云ふ桃李言はされど下自ら蹊を成すと、是れ君子の幽獨自から守りて其の聲譽の掩ふべからざるを謂ふなり、今は則ち然らず、長安の人士貴となく賤となく争て倡家に向ふ故に今時に在りては此の語之を娼家に用ゆるの尤も

切なるに如かず此の三字無窮の冷罵の中に在るあり、（以上第二小段） 囹圄吞棗すべ

御史府の柏樹に鳥ありて巢つくりしと云ふは漢書朱博の傳に見たり、翟公廷尉たりしとき賓客門に盈ちしが廢するに及びて門に雀羅を設くべしとは亦史記汲黯傳に出づ、其餘後漢の袁術少うして俠氣を以て聞へ數諸公子と鷹を飛ばし狗を走らすの事及び長安の閭里の少年吏を殺し仇を報ひ丸を探り客に借す等の事前後漢書に散見す則ち此の段用ゆる所皆な漢代の故事にして而も手に随つて巧みに之を驅使し毫も痕跡あるを見ず、凡そ典故を用ゐて詩を作らんとするものは須らく此等を取りて摸範と爲すべきなり、第一小段已に説て倡家に及ぶ故に下文は又之に接して細かに倡家の光景を描かき出せり、

娼家の盛は午間に在らずして夜間に在り、故に日一たび暮れて紫羅裙を着するの妓女盛裝して肆に列し歌喉を一轉して口に氤氳の香氣を吐けり、北堂南陌皆な倡家の在る所に接したる門口を謂ふ、夜々人如月、月は暮に出て、朝に没す、宿倡の人も亦是の如く、夜々暮に來りて朝に歸り去る、故に人如月と云ふなり、比擬絶妙と謂ふべし、〔南陌北堂連北里は其の入口より直ちに娼家の巢窟に達するの意〕 五劇三條控三市は娼家固より狭斜なりと雖又自から別に一郭を做したれば、五劇の交互せる小路あり、三條の大路之を経緯して以て遙かに長安大道の三市を控し游客皆な此に由つて以て入るなり、其の左右には弱柳青槐を種へ濃陰垂垂として地を拂ふ、乍ち一道の佳氣の紅塵を衝き天を暗して起るあるを見る、是れ想ふに貴客の至れるなるべし、然かり、是れ漢代の執金吾が千騎を引率して至れるなり、是に

於て翡翠の屠蘇を盛り鸚鵡の盃を酌み羅襦寶帶も君が爲めには解
 きもせん燕歌趙舞も君が爲めには開きぬべしと娼婦が貴客を奉承
 せるの情狀想ふに應さに然るべし抑娼家は是れ何等の地彼の游俠
 無頼の徒の此に宿泊するは猶ほ怒すべきも靴金吾は是れ堂々たる
 近衛の官乃はち此の花柳の地に出入して靦として耻づる所なく賸
 さへ自己が部下なる千騎の士卒を引率して公然此の豪游を成す歎
 すべきの甚しきものにあらずや而して特に此のみならず又更らに
 驚くべきものあり(以上第二小段)
 他なし身は出將入相の位に居り廟堂の重任を負ゆるものにして亦
 此の狹斜に來りて其の豪華を恣にせること是れなり此の輩の勢威
 氣傲正に天を薰じ手を炙く西に沈むの日も靡けば以て轉すべく既
 に陥るの天も援て以て回すへし且つ其の豪華を競ひ威風を耀やか

すに至つては互に相持して少こしも讓歩するとなき各自皆な以て
 第一人と爲せり故に剛直にして面諛を喜ばざるの名ある灌夫も意
 氣を以て之を排斥し廉正にして彈劾畏るゝ所なきの蕭望之も自家
 が權勢に由りて之を壓服し決して其の頭を出すを容るさず此の如
 きの意氣此の如きの專權固より己に豪華を極む況んや娼家に游ふ
 の時をや青虬紫燕の名馬に跨坐し肩上風を切りて得意揚揚たり此
 の輩の心中只々自から謂へらく歌舞以て千歳の長を消遣すべく驕
 奢以て五公の貴を凌轢するに足ると叙して盛滿盈極の處に至り頓
 然として收住す筆力奔馬を掣勒するの概あり專權判不容蕭相相の
 字複韻に屬す當さは是れ望の字の誤りなるべし蕭相は蕭何なり然
 れども此の句の指す所は蕭望之にして蕭何にあらず若し蕭何とせ
 ば則はち甚だ浮泛なればなり判は持に同じ拚は拚命の義にして斷

然たる決意を表するの俗語なり(以上第二小段)
 結局の一段に至りては忽然として筆を折挫し歩歩收束して感慨に
 入る緊健比なし、噫彼等は正さに歌舞千歳を長し驕奢五公を凌ぎて
 萬古其の歡樂を保維するに足るものと思量せるも安んぞ知らん節
 物風光推轉遷移の迅速なる絶て人と相待たざるを桑田の變じて碧
 海と爲るは亦只須臾間の事のみ牢きは金より牢きは莫く壽は玉よ
 り壽なるは無し而して昔時の金階白玉堂を見よ今は壞廢頽圯して
 惟青松の在るあるのみにあらずや金玉にして此の如し人洵どに何
 を何てか堪えん則はち今日大道に逸樂を尋ね狭斜に豪俠を擅にす
 るもの譬へば朝菌の晦朔を知らず曉蛸の春秋を知らざるが如く明
 日は則はち化して一堆の白骨數點の青燐と爲るに過ぎざるのみ榮
 華は何んぞ待む可けん歡樂は何んぞ極む可けん我が楊子の居の如

きは則はち然らず寂寂寥寥として玄默自から守り一床の書卷を擁
 して以て命を終ふ王侯の車馬の喧なく随つて離齷風塵の擾を絶す
 一人の來り問ふものなきも南山の桂花一たび發しては清香馥郁と
 して我が衣裾の邊に襲來す其の高遠拔俗の致寧る彼の富貴衒袴者
 流の窺知する所ならむや楊子が解嘲に「惟寂惟寞守德之宅」とあり又
 左太冲が詩に「寂寂楊子室門無卿相與寥寥空宇内所構在玄虛」と云ふ
 因つて楊子を借りて作者の自況とす則はち上文大道狭斜無數の鋪
 衍は皆な此の有心人が冷眼中より看出したるものなり一結清澹煙
 波盡きざるの觀あり(以上第二小段中)

本篇の大意以上節を逐ふて分疏す蓋し蟬聯の語格遽かに見れば其
 の細心の處を滑失し易きが爲めに肯て繁碎を避けずして一々之が
 解義を付したるなり其字句の出處來歴の如きは自から坊間の注本

あり詩の妙は典故にあらずして典故を使用して猶ほ己れより出づるが如くならしむるに在り彼の類祭魚陳して徒らに故事を注し以て淹博を翫るが如きは吾豈に敢てせんや故に特別要緊と認むるものゝ外今を縷述せず

長安大道の繁盛を寫すに於て却つて婦人の操行なきを點し狹斜娼窟の熱鬧を寫すに於て却つて男子が専權奢侈の舉動を叙す主賓地を換へて章法活變す是れ本篇の大關目なり相傳ふ廬照隣家極めて貧苦乃ち具茨山下に去つて田園數十畝を買ひ其の中に偃臥す晩年手足攀緩して頗る行歩に艱む春歸り秋至るごとに雲壑煙郊の勝に對し輒はち輿して戶庭を出て悠然として一望し以て自から慰むと本篇の結語に視れば其の事果然として過らず想ふに此の際憤世慨俗の涙の自から禁止する能はざるものあり

りて終に發して此の一大篇と爲りたるならん歟其の著又幽憂子三卷あり後ち自から意を決し親屬と訣れ穎水に投じて歿す天の文人を厄する實に此の如きものあり亦悲しむべきなり

通篇の平仄皆な後世の律調と同じ亦是れ七古換韻の正式なり特に「長安大道連狹斜」の一句其の第五字を拗して律調に入らず然かる所以のものは他なし如此の一大篇一句を以て之を領起せんと欲す若し仍は平調を用ゆるときは甚だ庸熟となりて全篇を興起すべきの勢ある能はず是を以て一字を拗して以て振作すること一番す是れ音節の至理なり然れども已に此の句を拗す則ち他に之と照應する所なくんば通首の鈎衡上大に妥ならざるものあり故に結段昔時金階白玉堂の句に於て特に其の第二字を拗して此の平衡を得せしむ斟酌微細の處を見るべし下の劉廷芝が洛陽城東桃李花以下多く

之と其の例を同うす韻法に至りては首の二小段八句を以て轉韻す
是れ全篇の總提たればなり中間御史府中烏夜啼の一段仍は八句を
用ゐる遙かに之と吸應す凡そ是等の作法決して泥すべからず文に臨
んで變化する所あらんことを要す然れども亦決して紊るべからず
千變萬化中或は正或は奇に仍は此の法則の外に一步を踏出せざら
んことを要す已に泥すべからず而して又紊すべからず是れ余が唇
燥舌乾して鈍根の人終に要領を得る能はざる所以なり

公子行

劉廷芝

天津橋下陽春水天津橋上繁華子馬聲廻合青雲外人影
搖動綠波裏綠波清迥王爲砂青雲離披錦作霞可憐楊柳
傷心樹可憐桃李斷腸花此日遨遊邀美女此時歌舞入娼
家娼家美女爵金香飛去飛來公子傍的的朱簾白日映娥

娥玉顏紅粉粧花際徘徊雙蛺蝶池邊顧步兩鴛鴦傾國傾
城漢武帝爲雲爲雨楚襄王古來容光人所羨况復今日遙
相見願作輕羅著細腰願爲明鏡分嬌面與君相向轉相親
與君雙棲共一身願作貞松千歲古誰論芳槿一朝新百年
同謝西山日千秋萬古北邙塵

公子行は樂府題游侠二十一曲の一此の篇豪華の公子が漁色荒淫の
狀を描寫す諷意約略長安古意と相似たり然れども彼れは長安より
着筆す則ち洪纖俱に包羅の中に在り此れは則ち單に公子の身
上に就て之を言ひ其の放游の狀を盡態極妍す局面の大小幅員の廣
狹截然として同しからず且つ彼れは暗諷を叙事中に寓す微にして
顯はれず此れは規戒を問答の中に託す更らに婉にして章を作すも
のなり

天津橋は洛陽に在り、隋の煬帝が造くる所、橋下水流れて橋上人行く。馬聲廻合、青雲外是れ、仰で橋上を望む。人影搖動、綠波裏是れ、俯して橋下を視る。此の二句、上下映帶の妙、其の光景恍として、目前に浮ぶ。畫も亦到る能はざるものあり、綠波の清迥として、澄澈せるは是れ、砂石の美麗にして、玉の如くなるに由り、青雲の離披として、四散せるは即ち霞光の絢爛にして、錦に似たるが爲めなり。此の承轉却て、大に理致あり、楊柳以て春心を傷ましめ、桃李以て柔腸を斷たしむ。橋邊の風光物として、可憐ならざるは莫し、况んや、教游美女を邀ふるをや、即ち相邀へて歌舞して、娼家に入らざるを得ざるなり。字句圓轉流暢、情文相環生す。是等は初唐の諸公の獨り、其の美を擅にする所なり。

朱簾白日、玉顏紅粉、峽蝶鴛鴦、漢武楚襄、皆な借つて、以て倡家行業の狀を寫す所謂、花團錦簇の文字なり。古來容光人所羨、以下一筆を陡轉

して規箴に入る、然れども其の表面仍は公子と倡婦との問答詞に借り、其の微意を言外に傾せしむ。神化の筆と稱するに足る。

容光は人の美む所況や、今相見るとや、則ち願はくは輕羅と爲り、明鏡と爲つて、其の細腰に着き、嬌面を分たんと、是れ公子美人に向つて、其の情を表するの詞なり。既に相向ふて相親しみ、雙栖して一身を共にせんことを誓ふ、乃ち芳槿一朝の榮は、妾が希ふ所に非ず、願くは貞松と作り、千歳に亘りて長く、其の色を換はざらんのみと、是れ美人が公子の語に答ふるの詞なり。夫れ然かり而して、百年の烏兔倏忽同じく謝す、千秋萬古の後誰れか、北邙一片の煙塵ならざる、抑亦誰れか、眞に能く貞松と作つて、千歳の久しきに耐ゆるものぞ、作者の感歎、只此の二句、海盟山誓、綢繆纏綿の言ありと、雖も實は皆な過眼の雲煙に過ぎざるを謂ふなり、吾朝の服部南郭小督の曲の結局、明朝化作北山

霜は實に此の語を學びて妙に變化の法を得たり、併觀して以て參核に資くべきなり、

此の篇「人影搖動」の句第二字を拗す、故に「青雲離披」の句亦第二字を拗して之に配せり、「古來容光」況復今日皆な此と同例に屬す「傾國傾城漢武帝」漢を以て楚に對す故に止むを得ずして仄聲を用ゆ、則はち與君雙栖共一身の君の字故らに平聲を用ゐて之と對峙せしめたり、又其中多く不黏法を用ひたり、不黏とは上句下句と相黏せず、若くは前二句後二句と相黏せざるを謂ふ、上句下句と相黏せずとは譬へば可憐楊柳傷心樹、可憐桃李斷腸花の如き句は俱に是れ律句なるも若し律調を以てするときは上句○○●●○○●●なれば下句必ず●●○○●●○ならざるべからず、而して此れ之に反す即はち相黏せざるなり、前二句後二句と相黏せずとは亦此の例に準し平起の聯に接するに平起の聯を以して仄起の聯に接するに仄起の聯を以てしたるものを謂ふ、長安古意の詩の結尾四句、此の篇の花際徘徊云々の四句の如き是れなり、清の翁覃溪は七古換韻の平仄律句を用ゆる妨げなきも宜しく不黏法に依りたるものを以て正體と爲すべしと謂へるも亦此の種あるに由れるなり、用韻は此の篇殊に參差し得て法あり、即ち八句一解を以て全篇の中心とし前後に各四六一轉のものゝ配置して之が鈞衡を取れり、以下の諸篇大抵此の意を以て推すときは其の理従つて喩とるべし、故に一々之が辨を附せず、李杜諸人の専ら矯健を事とせるものに至つては自から當に別に論すべきなり、

代悲白頭翁

洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家、洛陽女兒惜顏色、行逢落花長歎息、今年花落顏色改、明年花飛復誰在、已見松柏

摧爲薪更聞桑田變成海。古人無復洛城東。今人還對落花
風。年年歲歲花相似。歲歲年年人不同。寄言全盛紅顏子。應
憐半死白頭翁。此翁白頭眞可憐。伊昔紅顏美少年。公子王
孫芳樹下。清歌妙舞落花前。光祿池臺開錦繡。將軍樓閣畫
神仙。一朝臥病無相識。三春行樂在誰邊。宛轉蛾眉能幾時。
須臾鶴髮亂如絲。但看古來歌舞地。惟有黃昏鳥雀悲。

八四

此の詩人口に膾炙せること尤も久く、其の措詞命意俱に明晰にして
復た解を費すべきの語あることなし、因て聊か其の結構布置の工妙
なるを標舉して之が評釋に充てんと欲す、既に題して代悲白頭翁と
謂ふ、凡手必ず先づ翁に死黏して、以て端を發すべし、然るに此の篇は
全く翁に緣故なきの桃李と女兒に依つて領起す、迥かに夷の思ふ所
に匪ず、以下則はち又宛宛轉轉曲曲折折花と人どに就きて盛衰開謝

の理を反覆し、花落ちて復た開くも人は則はち一たび老ひて復た壯
なる能はずと云ふに至り始めて轉じて本題に入る、所謂る綽綽乎と
して餘裕あるものなり、既に本題に入りて仍は未だ其の正面に叙し
到らざるに忽ち又轉じて其の少時の行樂を追叙するの一段に接す
一開一闔應接に暇あらず、羅浮の風雨の縹緲として離合せると一般
の奇觀なり、清歌妙舞落花前の一句上文無數の落花を收束して虚實
適又相反映す、文心の細なる髮の如し、蛾眉は是れ女兒に就て言ふ、鬢
髮は是れ翁に就て言ふ、結尾の二句竿頭更に一步を進め、人生の行樂
往として然らざるは莫し、則はち其の悲むべきもの固より獨り女兒
と翁とのみに非ざるを見るなり、而して本題の正面は則はち儘かに
惟、是れ兩句曰はく、「一朝臥病無人識、三春行樂在誰邊」
劉希夷始め此の詩を作るとき、今年花落顏色改、明年花開復誰在の

八五

一聯に至り心竊かに其の不祥に涉れるを疑ひ除き去らんと欲す、既にして又年年歳歳花相似歳歳年年人不同の一聯を得たり、乃はち割愛に忍びず、自から歎じて曰はく、死生は命あり、豈に此の虚言に由らんやと、遂に併せて之を存し、出して其の舅宋之間に示す之間甚だ、年年歳歳の一聯を愛し、其の未だ人に傳はらざるに先ちて之を乞ふて自家の詩と爲さんと欲す、劉口之を許して竟に與へず、之間怒かり竊かに奴をして土囊を以て之を壓殺せしむ、劉竟に非命に死すと、此事才子傳に見えたり、之間が残忍なる寔とに痛恨すべしと、雖此の一聯遽かに見るときは甚だ、以て警句と做すに足らざるものゝの如し、清の趙甌北之を解して曰はく、蓋し此等の句人々意中に有る所にし、て卻つて未だ人の道過を経ず、故に一たび説出するときは便はち人々其の意を出てんと欲する所の如くして流播に易く、遂に當時に傳

へて後世に名あるに足れるなりと、案ずるに李太白が今人不見古時月、今月曾經照古人、岑參が今年花似去年好、去年人到今年老等の句は皆な此の一聯を以て粉本と爲して而かも自然の妙は終に劉の原作に譲る、甌北の言真に吾を欺かざるなり

下山歌

宋之間

下嵩山兮多所思、携佳人兮步遲遲、松間明月長如此、君再遊兮復何時、

是れ古歌謠に擬したるもの、寧ろ騷賦の斷章截句として見るべし、詩と謂ふには足らざるなり、之間其人固より齒するに足らざれども、其の詩明河篇の如きは殊に觀るに堪えたり、彼を棄て、此を取る、何の故なるを知らず、此の他初唐の諸名家中李嶠が汾陰行の如きは尤も千古に傳誦せられたるものたれば、一代の詩を選するに於ては

必ず録に著はさるべからず、然るに于鱗此等の詩を一切收せずして、卻つて此の機率のものを採録す、食蓼嗜茄の癖なりと云はざるべからず、豈に其の淺率の處大に古色あるに近かしとせるに出るか、試に漢魏六朝を通じ遍ねく諸家の吟詠を求むるに質直朴老を旨とせるものと雖も、未だ平易卑近此の如く甚しきものあるを見出す能はざるなり、初學の士若其の解し易きが爲めに此等の作を取りて、摸本と爲すと、きは竟に一種言ふべからざるの習氣を醸し、其の害を貽す、洵とに尠少にあらず、則はち余が之を痛斥するも亦只、初學の爲めに津筏を與へんと欲するが故のみ、肯て輕々に前人を臧否するには非ざるなり

「多所思」步遲遲の措詞頗る低回、夷猶の致を得たり、然かる所以のものは、則はち佳人を携ふるが爲めなり、明月は長かく如此も佳人の再游

は杳として期すべからず、是れ遅々たらざらんと欲するも、勢ひ能はざるなり、若し單に味を此の點に尋ねれば、淺率なりと雖、亦限り無き、縷縷の情を見る、

○至端州驛見杜五審言沈三佺期間五朝隱王二無競
題壁慨然成詠

逐臣北地承嚴譴、調到南中每相見、豈意南中岐路多、千山萬水分鄉縣、雲搖雨散各翻飛、海濶天長音信稀、處處山川同瘴癘、自憐能得幾人歸。

宋之問人と爲り殊に特操なし、初め則天武后に阿附し、一時春袍の譽を得たるも、齒に臭疾あるが爲めに斥けられ、遂に當時の倖臣張易之に諂事す、中宗の時に至りて易之誅に伏す、當時之と干連せるの名士杜審言沈佺期間朝隱王無競等皆な南荒に配流せらる、之間も亦次で

澠州に貶せられ途端州に至り前の四名が題壁の詩あるを見て此篇を作る既にして之間配所の苦役に耐ゆる能はず逃れて張仲之が家に匿る仲之が武三思を謀殺せんとする計あるを知るに及んで則ち又反覆して之を武三思に密告し功を以て亡命の罪を免るされ仕宦に擢用せられしが幾もなくして太平公主に媚び汚行頗る多し睿宗の即位に至りて又欽州に貶せられ後ち御史の劾奏に逢ひ終に死を賜ふ人にて劉庭芝を虐殺したるの報なりとすと云ふ斯れ之間は實に一有才無行の士其の詩縱然ひ矯飾を事とするも其の性情の邪僻心術の偽詐は固より掩ふべきにあらず何んぞ貴むに足らんや本篇の如きは友朋聚散の思身世淪落の感固より常情と異なる所なけれども精神甚だ乏しくして爲めに沈摯悲涼人を動すの處あることなし其の情全く偽なるを以てなり獨り恠しむ白雪樓中の人何を以

てか其の自から以て精金美玉を揀擇せりと爲せる本選の中に向つて如此の作を登載して卻つて唐一代の必傳の名作に於て闕畧に従ふもの頗る少なからざるは解すべからざるの尤ども甚しきものなり

○鳥夜啼

李白

黃雲城邊鳥欲棲。歸飛啞啞枝上啼。機中織錦秦川女。碧紗如煙隔窻語。停梭悵然憶遠人。獨宿空房淚如雨。

黃雲城邊夕陽正に春く是れ群鳥の將に栖に歸らんとするの候其の啼聲啞啞たり歸飛の二字直ちに映射して閨中の離婦が眼中に入る所謂見る所に由て興を起こし物に觸れて懷を傷ましむるもの情景雙關の妙神に入れり此の婦正に機に坐して錦を織る則ち彼の秦川の寶氏が妻女の題文錦字を織りて以て其の夫に寄せんとする

に非ざるを得ん乎、鴉聲愈噪、日亦漸やく、已に沈む、婦乃はち旋起ちて、碧紗の薄して、煙の如くなる、意構に倚り、悵然として、遠望し、自言、自語して、遠人の歸り來らざるを憶ふ、無聊の極、悽愴の至、碧紗如煙、隔窓語、儘かに是れ七字と雖中、に千萬無量の涙痕あり、獨宿空房、淚如雨と云ふに至つては、彼の歸飛の栖鳥に、反照して、更らに百倍の酸楚を形出す、賀知章此の篇及び烏栖曲の二首を讀み、案を拍て、激賞し、以て鬼神を泣かすべしと云へるは、洵とに允當の評なり、三百篇比興の義、其の神理大抵此の如し、能く之を心に得て、之を手に應ずるものは、李青蓮定に千百人中の第一人にして、前に古人なく、後に來者無きものと謂ふべし、劉辰翁は此の篇を評して、語は或は此より深かきものあらん、然れども情の至る所は實に皆な此の如くなる、能はず、則はち詩は必ずしも語の深かきを貴ばざるなり、從來樂府を

言ふもの未だ以て此を知るに足るものならずと謂へり、吳昌祺も亦其の含蘊無窮にして、音節絶妙なるを稱す、前人の定評已に確として、易ゆへからず、我れ亦必ず之が爲めに辨を費さざるなり、鳥夜啼は晋宋間の樂府名にして、臨川王義慶が譚を蒙るに際し、其の姬妾烏の夜啼くを聞て、明日應さに赦あるべしと云ふを聽き、悲んで之を作りしと言傳ふ、其の後六朝の諸作者多く亦烏啼を借つて、情懷を抒ふ、此れ其の體に浴するなり、詩の樂府に於けるは、汎稱するときは樂府亦詩の一種なれども、對稱するときは少しく區別あり、故に其の作法亦詩の一定規矩あるに同じからず、此の詩冒頭二句を以て韻を轉じ、其の後四句を以て之に接するが如き、其の一例として見るべきなり、青蓮が時代に至りては、漸やく古詩中に律調あるを忌む、故に前二句平韻を押する處、首句は第二字と第五字を拗し、次句は第五

字を拗す、仄韻を押するものに至つては多く、律句を用ゆるを妨げず、律調に仄韻を押するものなきが故にして、是れ五言古と同例に屬す、然れども碧紗如煙の句の如きは特に又其の第四字を拗せり、二四五の平仄は律調中尤も嚴格なる定規あるものにして、其中第五字亦尤も要緊の處に屬せり、故に古詩を作りて以て律調に別せんとせば、此の三處の平仄に於て細かに商酌を行はんと要す、然るときは思半に過ぐべければなり、

江上吟

木蘭之棹、沙棠舟、玉簫金管、坐兩頭、美酒樽中置、千斛、載妓隨波任去留、仙人有待乘黃鶴、海客無心隨白鷗、屈平詞賦懸日月、楚王臺榭空山邱、興酣落筆搖五嶽、詩成嘯傲凌滄洲、功名富貴若長在、漢水亦應西北流。

發端の四句直ちに即景を寫し、以下は今古を俯仰し、放浪自から遣る、太白の襟懷千秋の下猶ほ彷彿として之を想見るに足る、今夫れ木蘭の棹を棹し沙棠の舟を浮かべ、傾國傾城の美人をして玉簫金管の樂器を備へて其の左右に侍坐せしめ、樽中には千斛の美酒を置いて、浩蕩たる煙波に向ふて風に任せて去留し自在に逍遙を試みんか、天下の樂事恐らくは此の上に出でたるものなかるべし、以て仙人に喩ん乎、仙人は仍ほ黃鶴に乗ずるに待つことあり、我れは則ち必ず待つを要せざるなり、以て海客に比せん乎、海客は無心にして始めて白鷗に隨ふ我が有情にして、妓を載せ波に隨ふに較ぶれば、果して如何や、是れ仙人海客俱に以て我が今夕の歡に換ゆるに足らざるなり、屈平が詞賦は今に到つて天地に照耀し、日月の雙び懸るが如し、然れども其の人の境遇は則ち顔色憔悴し、形容枯槁す、豈に復た我が快適に

九六
較ふるを得んや。楚王の臺榭は之に反し陽臺の神女朝に雲と爲り暮に雨と爲る其樂み言ふべからずして而して今や則はち惟々一片の山邱を餘すのみ然るときは楚王の樂亦未だ慕ふに足らざるなり我が今夕の豪游は興酣にして落筆して五嶽を搖かし詩成つて嘯傲して滄洲を凌ぐ是れ洵とに屈平詞賦の才を以て楚王臺榭の樂を兼ねるもの既に顔色憔悴の苦なく又山邱寂寞の悲あることなし豈に天地間古今第一等の樂事を極むるものと謂はざるを得んや若し功名富貴を以て恃むべしとして徒らに逸豫を之れ圖るが如きは是れ又陋の陋なる者此の一點より言ふときは我れは寧ろ屈平か詞賦の日月と俱に懸るを取らんのみ何となれば功名富貴の長く在らんことを望むは眼前の漢水の西北に向つて流れんことを求るが如く到底出來得べからざるの事たればなりと漢水は蓋し東南に流れて江海

に入る故に之を反言して結と爲す筆力遒健向ふ所前なし天仙耶化人耶吾れ得て之と名づくる所を知らず

九七
詩一氣にして下る而して又手に隨つて波折し自から章法を成す仙人有待乘黃鶴海客無心隨白鷗屈平詞賦懸日月楚王臺榭空山邱單に此の四者に就て言へば仙人の待つあるは何ぞ海客の無心なるに及ばん楚王の臺榭豈に屈平の詞賦に並ぶことを得んや何となれば黃鶴は未だ必ずしも能く冲舉せずして白鷗は自から縦適すべきに足れり臺榭は一時盤游の樂を取るに過ぎざるも詞賦は以て千秋不刊の文を傳ふ可きが故なり然れども本篇着想の妙は茲に在らずして却て作者自家の身分高かく此の四者の上に位置せるに在り興酣落筆搖五嶽屈平が千秋の著作と楚王が一時の游樂とを兼有し詩成嘯傲凌滄洲仙人海客と雖以て美むに足るなし是に於て乎始めて所謂

る。神游八極の大本領を見るなり。
 太白が七古は大江風なきに濤浪自から湧き白雲卷舒して風に從つて變滅するが如し此の篇は稍々初唐の風調を存し太白に在つては未だ至れるものにあらざるも于鱗が特に之を選する所以は轉其の初唐の風調を帶べる處に在るなり蜀道難は太白が空前絶後の傑製于鱗則はち其の放肆雄邁にして初唐の風調と合はざるが故に頽然自放の四字を以て一筆に勾抹す于鱗が眼中初唐にして外殆んど所謂七言古詩なきなり是れ笑ふ可きのみ

此の詩既に七古の一韻到底格を開らく故に押韻の句大抵第五字を拗して以て律句に別せり第二句玉簫金管坐兩頭三四五並に拗せざるべきは第六字を拗して之を救ふ美酒樽中以下四句の律句を用ゐたるは是れ此の詩仍は初唐の風調を帶ぶると云ふ所以なり然れど

も置千斛の置隨白鷗の隨句を隔て、遙かに相呼應し別に一種の音節を成したれば未だ律調と同視すべからざるものあり清の王琦は以爲らく此の詩章法句法逸才より出つると雖未だ必ずしも慘澹經營して之を出さずんばあらず恐らくは一斗百篇の時の能く構思する所に非ざるのみと信とに然り

貧交行

杜甫

翻手作雲覆手雨紛紛輕薄何須數君不見管鮑貧時交此道今人棄如土

此の篇箴の如く謠の如く傷世慨俗の意片語にして盡く千秋萬古炎涼の世態洵とに翻手作雲覆手雨の七字以外に跳出する能はず朱鶴齡太白の前門長揖後門關及び甫が當面輸心背面笑の句を並へ舉げて此と同慨なりと謂ふ立意を以て言へば當さに然るべし然れども

本篇の起七字妙に形容を兼ね、彼の二作の太だ暴露せるが如きの比にあらざるがごとし結處頗る樸拙、即ち杜が摯厚人に過ぐる處若し太白に在らしめば則ち斷として此の語を作すを屑とせず、是れ兩家の別なり。

短歌行贈王郎司直

王郎酒酣拔劔斫地歌莫哀。我能拔爾抑塞磊落之奇才。豫章翻風白日動。鯨魚跋浪滄溟開。且脫劔佩休徘徊。西得諸侯棹錦水。欲向何門跣珠履。仲宣樓頭春色深。青眼高歌望吾子。眼中之人吾老矣。

廬世誼は曰はく突兀横絶跌宕悲涼と洵とに其の感激豪蕩の妙を評し得て盡く蓋し此を誦して未だ眉揚がり肉躍り神壯に色動かざるものあらず特に其の作法の離奇にして意態の雄傑なる實に少陵が

獨創の格に屬す王郎司直なるもの想ふに時に得られず西將さに錦水に棹して蜀に遊び其の他の諸侯に干謁して知遇を得んとす故に陵別に臨み筵に當つて特に此の歌を作り以て其の行色を壯にし兼て之を慰むるなり上下二段各五句起語十一字を以て一句と爲し毎段の末又各單句を以て相間は其の節を急促ならしむ蓋し起語の甚だ長きを以て此の急調にあらざれば節を成さざるか故なり

王郎酒の酣なるに當つて不平蹴躄の氣自から制する能はず乃ちち劍を抜き地を斫つて歌ふ其の聲甚だ哀し然れども郎請ふ哀む莫れ郎をして此の狂態あらしむるものは其の磊落の奇才平生に抑塞せるが爲めのみ我れ願はくは郎の爲めに一たび之を振拔せん豫章の大木風に翻るときは白日も爲めに動き鯨鯢の巨魚浪を跋めば滄溟も爲めに開く郎が才の大にして氣の雄なる譬へば猶は豫章と鯨魚

の如し此を以て諸侯を干さば將た何事か爲すべからざらん且つ心を緩ふして佩劍を脱し去れ徒悲して徘徊するを休よ以上是れ一段莫哀の意を重言して以て之を勸む豫章鯨魚皆な以て所謂の奇才に喩ふ白日滄溟は暗に王郎が將に去つて干かさんとするの有力者を影寫するなり歌莫哀は命令の詞且つ劔佩を脱せよ徘徊するを休よ語々頓挫して之に緊照す急遽勸止の神を寫し得て出づ

郎今將に西蜀の諸侯に得られんとし遠く濯錦江水に棹して下らんとす西蜀の諸侯も亦頗る衆し未だ何の門に向つて珠履を跋いめんと欲するやを知らざれども願はくは善く選む所あれ良禽擇木の智に耻つる莫れ仲宣樓頭即ち此の臨別の地春色正に深かし吾れ特に青眼を以て郎を送り高歌して此行の成功を望む蓋し吾が眼中の人は惟吾子一人あるのみ我の如きは老て用ふる所なきの廢材のみ

故に郎が成功得志の日を見て聊か自から慰めんとす斯れ之を望むの最も切なる所以なり以上一段既に之を勸め又之を鼓舞す欲向何門蹴珠履一句百忙中又申戒の意を寓し輕舉の悔なからしむ何ぞ用意の眞摯にして周到なるや仲宣樓其の地を點し春正深其の時を點す郎に在つては之に哀む莫きを勸め吾に在つては高歌して以て望む照耀生動機括躍如たり眼中之人吾老矣結語覺せず吐露して自家の况遇上に到る郎と吾と同じく是れ不遇の人而して郎は猶少かく吾れは已に老ひたり老ひて成るなし聊か少者の其の所を得たるを見て自から楽しまんのみ悲を言はずして悲箇の中に在り

句法長短參差して一ならず則ち理を以て言へば多く律句を挿むも妨なきに似たり而して此の篇徹頭徹尾皆な第五字を拗し獨り平韻を押するものゝみに止まらず後段仄押の處亦五字を拗して一律

調なし、但し末一句は第五字拗せざるに由り、第二字を拗して調を取る、此の理前屢述べたるが如し、此等に就て之を研究すれば、他が如何してか、初唐平弱の調を一洗し、此の突兀矯健の聲調を創造し、來りしかの理を會し得べし、既に此の理を會す、則ち古詩一種の平仄自から、了然たるを得べきのみ、

高都護驄馬行

安西都護胡青驄、聲價欵然來向東。此馬臨陣久無敵、與人一心成大功。功成惠養隨所致、飄飄遠自流。沙至雄姿未受伏、櫪恩猛氣猶思戰場利。踠促蹄高如踏鍊、交河幾蹴層冰裂。五花散作雲滿身、萬里方看汗流血。長安壯兒不敢騎、走過掣電傾城知。青絲絡頭爲君老、何由却出橫門道。

杜少陵の馬の詩、本篇にして、外天育、縹騎、圖歌、驄馬行、曹將軍畫馬、丹青

引等の作、一にして足らず、然れども、意象各異にして、題を相て論を立て、つるの妙あり、此の篇は高都護の馬を詠ず、都護蓋し此の馬に乗して功を西域に立つ、斯れ人馬俱に功あり、則ち馬を詠ずるもの筆々照らして、都護の身上に到り、隱隱として、都護が遭際を寫す字々、精悍にして、字句亦皆な妥帖排冪、他の諸歌行の變幻超忽、方物すべからざるものに較ぶれば、大に規矩の循すべきものあるを覺ふ、案するに安西都護は西域の總督府にして、太宗の貞觀年中始めて之を置く、于闐以西波斯以東は皆な其の管轄に隸せり、高都護は即ち高仙芝、仙芝此の官に任じてより、天寶六年に當りて小勃律を撃ちて、其の王を擒にしたり、是れ所謂大功なり、同八年仙芝入朝して、長安に來る馬も亦隨ふ、時に少陵京師にあり、則ち此の詩を賦して、之に贈れるなり、安西都護が乘する所の馬、胡地に産して、渾身青毛、其の聲價固より已

に耳にすると、今や歎然として其の主に従ひ西域より至つて此の東方の長安に來れり、歎は忽と同意同義特に其の字を異にせるのみ、歎然向東、即ち長安に來れるなり、此れ則ち一詩の根以下二句は聲價の二字を承けて之を申説す、蓋し此の馬一たび陣に臨むときは向ふ所敵なく、其の主人と一心同體にして終に小勃律王を破るの大功を奏し得たり、是れ聲價の一時に昂かき所以なり、功成惠養隨所致の四句は專はら來向東の意を申説す、大功已に成りて主人の惠養益厚ければ、其の致す所に隨つて千里の遠きを辭せず、飄々として彼の西域の流沙河より此の長安に來り、至ることゝなれり、漢の天馬徠の歌に「天馬徠從西極涉流沙」とあり、是れ流沙は西域の河名にして殊に名馬に緣故あるの地たり、故に之を用ゆ、馬已に長安に來れども、其の雄傑の姿をさく、未だ槽檻の間に伏して、主恩を受け、安逸に耽るの

さまあらず、其の勇猛の氣猶ほ戰場の利を思ふ如く、少こしも懈怠の色あることなし、此の二句馬を寫すと雖、實は人を帶んで之を言ふ、此の馬已に人と心を一にす、則ち其の人の少こしも功に誇り、逸を圖るの意なきこと、言外に見えたり、又兼ねて結處の命意を胚胎す、結二句は此の句より拓開し出されたるものと知るべし、腕促蹄高如踏鐵の四句は是れ本題の正面、專はら馬の骨相を寫して而て又西域の地名を點じ上の歎然向東及び流沙等の句に映射せり、馬を相する法腕は極めて細にして促ならんと要し、蹄は尤も厚くして大ならんことを要す、二者兼ねて具はるもの則ち名馬たり、此の馬腕已に促す蹄も亦高かし、高かしとは猶ほ厚しと云ふがごとし、其の地を踏んで堅強なるは殆ど鐵を踏むかと疑ふ、鐵を踏むとは天然の蹄爪、鐵を着するに異ならざるを謂ふ、故に其の西域より來るの路上、交河に凝結

せる氷の如きは此の堅蹄の爲めに蹴裂せらるゝもの幾回なるを知らず又其の毛色の特異なる五花の斑紋總身に散在して殆んど雲の身に満るがごとく西域の長途を経るも疲困の状なく萬里にして始めて汗流るゝ血の如きを見る汗血は名馬の本色なり是を以て其の長安に来るや健壯を以て誇るものと雖畏れて肯て騎らず雄姿猛氣の凜然たるが故なり以て彼の二句に應ず其の走過の迅捷なるは一掣の閃電光も嘗ならず長安廣しと雖滿城の人盡く之を知らざるは無し以て聲價歎然の句を收束せり古樂府陌上桑に黃金繫馬尾青絲絡馬頭とあり青絲は手綱を道ふ此の雄傑の名馬にして今や青絲其の頭を纏絡し安養せられて休息に就き行將さに君が爲めに老んとす然れども亦豈に遂に出て大功を建るとを忘んや只日に何に由つてか却つて横門の道を出で再び西域に至つて彼の戰場に赴かん

ことを念ふの外他に求むる所なきなり横門とは長安城北最西の門の名にして西域に赴くは必ず路を此に取れるに依り斯く言ふのみ馬猶は此の如し人固より知るべし高仙芝今恩を承けて入朝すと雖其の心未だ曾つて一日も戰場を忘れず名馬の本色は則ち名將の本色なり爲君老の三字馬を以て言へば君の字其の主を指し人を以て言へば則ち天子を指す故らに君字を用ゆるもの讀者自から其の獨り馬の爲めに之を言ふに止まざるを知るべきなり

此の篇仄韻を押したるもの中の一二句を除くの外律句を用ゐたる所なし胡青驄來向東成大功傾城知等の句皆な第五字に於て平聲を用ゆ健舉高爽初唐の面目を一洗し盡くせり長安壯兒不敢騎の句第五字偶仄聲を用ゆ則ち其の第四字及び第六字に於て並に拗調に倚り律句の一路に入ること避く是れ亦正格に外ならざるなり

韻法前三解皆な四句轉韻後二解二句轉韻蓋し結尾殊更に其の調を急迫ならしめて雄姿猛氣の悍驚なるに副はしめしなり

張延は此の詩を評し胸次高超にして筆を下す方さに卓絶す惟に詩格の高きのみならず亦以て少陵が人品を見る晩唐の曹唐が病馬の詩一朝千里心猶在曾敢潛忘秣飼恩と云へるは乃ほち乞兒の語のみと爲せり詩に品格を重んずるは斯の語能く之を盡したり

送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白

巢火棹頭不肯住東將入海隨烟霧詩卷長留天地間釣竿欲拂珊瑚樹深山大澤龍蛇遠春寒野陰風景暮蓬萊織女回龍車指點虛無是征路自是君身有仙骨世人那得知其故惜君只欲苦死留富貴何如草頭露蔡侯靜者意有餘清夜置酒臨前除罷琴惆悵月照席幾歲寄我空中書南尋禹

穴見李白道甫問訊今何如

孔巢父少して李白韓準張叔明陶沔等と徂徠山に隠れ酣歌して酒を縦にし竹溪六逸と號す是れ其の人本と神仙一輩の人天寶中玄宗の召を辭し病と稱して官に就かず去つて浙江の東に游ふ當時其の酒友なる李白も亦江東吳越の間に在り而して其の地又東海に近く仙靈窟の宅の處と稱す是を以て此の詩多く仙趣を述べて尋常別離の語を成さず自是君身有仙骨世人那得知其故とは是れ一篇の骨子なり詩意に據るときは此の詩蓋し蔡侯なるもの特に巢父が爲めに送別の態を設く少陵之に臨んで茲の篇を作りしなり蔡侯其の名傳はらず偶少陵が此の作に由つて其の姓氏を百世に垂る幸にあらずと謂ふべからざるなり

起段三句一氣呵成し遠性風と俱に疎に逸情雲の如く上れり冒頭四

句自からはれ總提曰はく巢父掉頭して肯て風塵に住するを屑とせ
 ず東の方將さに海に入り煙霧に隨ふて去らんとす是れ其の人豈に
 眞に汨沒無聞に終らんと欲する乎否否巢父は肯て住まらずと雖巢
 父が詩卷は長く天地の間に留まれり其の姓名已に千秋に足る乃は
 ち釣竿百尺去つて海底の珊瑚樹を拂はんと欲す何ぞ其の游の壯に
 して其の興の豪なるやと詩卷長留ほ不肯住を反跌し釣竿珊瑚は入
 海を緊照せり深山大澤以下の四句は巢父が將さに去らんとする東
 海煙霧中の光景を想像し兼ねて別時の時序を點ず曰はく深山大澤
 には必ず龍蛇を産すと云ふ是れ左傳の語彼の東海は仙靈の地想ふ
 に此に類するもの多かるべし君遠く之に赴く時正に春寒く野陰り
 て風景の將に暮れんとするに逢ふ乃はち彷徨して宿處に迷ふの所
 定めて蓬萊の織女の遙かに雲車を回らし來りて虛無縹緲たる東海

煙霧の間を指點し是れ君が當さに征くべきの路たるを示導するあ
 らんのみと江東吳越の地方山澤極めて多し深山大澤の語蓋し泛然
 古を用ゆるにはあらず蓬萊織女は東海の爲めに之を點出し虛無征
 路は入海煙霧の語尾を收束せり而して句意の恍惚縹緲たるは全く
 離騷に原本す少陵が此の種の處未だ多く李白が獨得の技に遷らざ
 るを覺ゆ自是君身以下の四句は前の懽恠を解釋し以て送別上に跌
 落す曰はく然かる所以のものは自からはれ君が身に仙骨あるを以
 てのみ然れとも凡俗の世人なんぞ復た其の故を知ることを得んや
 動もすれば君が遠く去るを惜み只苦苦之を死挽して留めんとする
 ものあり是れ明らかに其の故を知らざればなり君の意は乃はち謂
 ふ富貴は艸頭の露に何如れやと富貴を遠視すること管に艸露の
 みならず是れ君に仙骨ある所以將た其の謝病して歸る所以而して

凡俗の世人の竟に其の故を知る能はざる所以なりと叙して此に至りて反筆頓住し、以て下文の送別を開らく所謂の轉筆力を費さいるものなり。

結段六句、首の二句は餞送の席を言ひ、次の二句は搭して作者が送行の感に入り、末の二句は餘意を述べ、前十二句、四句ごとに、一小節を成し、後六句、二句ごとに、一小節を成す、亦た鈞量相配するの妙なり、曰はく蔡侯は蓋し靜者にして流浴輕躁のものに同じからず、是を以て君と別れに臨むも亦肯て彼の苦死留住の狀を成さず、其の意綽然とし、餘地あり、此れ即はち所謂の其の故を知れるものなり、因て清夜に酒を置き階除に臨んで靜かに餞送の筵を設く、我も亦其の席に在り、琴を罷めて黯然として惆悵す、此の別の甚だ悲しきには非らざるも、故人一旦遠く去る、尊前相對して、亦未だ遽かに袂を分つに忍びざる

ものあるなり、明月皎々として來つて席を照す、則はち月獨り、此の心を、知るものに似たり、知らず君去つて、我に空中の書を寄する果して何の年にあるや、吳越の南會稽の山に禹穴あり、故人李白亦現に其の處に棲隱す、君若し之に逢はば幸に甫か爲めに其の安否如何を問訊するの意を致せよと、月照席は、清夜の語尾なり、空中書の三字尤も靈妙遙かに前段煙霧虛無仙女指引等の事に迴應し、又明月の席を照らすに因つて想ふて空中の書に到る語に線索ありて唐突ならず、前段より此に至る、都て此の游の飄逸にして其の樂の仙に比すべきを言ひ、之を苦留するものを以て其の故を知らざるに坐すと爲せり、而して罷琴の二句、忽ち離愁の意を逗出するものは、其の別の悲むべきと否とに關せず、將さに別れんとするに際しては、何人も未だ悵然たらざるものあらず、若し專はら豪快の語を成すときは、朋友の誼に於て

未だ甚だ無情を免かれざるが故なり是を語に分寸ありと曰ふ、
 一空中書其の人已に仙女に指引せられて虚無の煙霧に入る是れ語を
 設けたるに過ぎずと雖詩の表面仍は之を實として其の書を空中よ
 り寄せよと曰ふ故に妙なり清の浦起田は此句を解釋するに甚だ真
 を認め巢父真に仙と爲り道を得ば書を空中より寄せて我を招くべ
 しと囑附したる語なりと注せり是れ詩に表裏の別あるを知らざる
 ものにして所謂高叟の詩を言ふ真に固なるものなり、

飲中八仙歌

知章騎馬似乘船。眼花落井水底眠。汝陽三斗始朝天。道逢
 麴車口流涎。恨不移封向酒泉。左相日興費萬錢。飲如長鯨
 吸百川。銜杯樂聖稱避賢。宗之瀟灑美少年。舉觴白眼望青
 天。皎如玉樹臨風前。蘇晉長齋繡佛前。醉中往往愛逃禪。李

白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣
 是酒中仙。張旭三杯艸聖傳。脫帽露頂王公前。揮毫落紙如
 雲煙。焦遂五斗方卓然。高談雄辯驚四筵。

此の篇首なく尾なく各人各事を詠じて絶て連続せず其の人ごとに
 或は二句或は三句或は四句毎句に韻を用ゐて参差錯落し甚しきは
 韻字の重複せるを忌まず是れ其の體全く漢の柏梁聯句より脱化し
 出でたるもの蓋し柏梁聯句は每人一句各其の興懷を言ふ前に起を
 用ゐず後に收を用ゐず彼の章法句法の如きは皆な講せざる所にあ
 り本篇既に之を祖とす則ち古詩律句を雜ねざるの定規も亦頗る
 寛に從ひたり固より一時游戲の作一あるべくして二ある能はざる
 ものたればなり、

李太白初め召されて翰林中に入らせしに高力士が讒を蒙りて玄宗

漸やく之を疎んずるの意あり、乃ち浪跡して酒を縦にし、賀知章崔宗之の諸人と結んで酒中の八仙と稱す、此則ち本篇の事實なり、然るときは八仙の主と稱すべきものは、實は太白にして、其餘は之に附和して一時の豪を逞したるに過ぎず、故に本篇太白を叙する處に於て特に四句を費し、又「自稱臣是酒中仙」の句を提して特に之を太白に繋ぐ、作者微意に在る所隱然として重きを太白に置けるに在るを知るべし。

傳に據るに、賀知章性放曠にして善く談笑す、晚年尤も縱誕にして復た禮度なし、自から四明狂客と號し、又秘書外監と稱す、天寶三年病を以て其の吳中の郷里に還り、道士と爲らんことを乞ふ、玄宗之を許し、其の知名の士なるを以て鑑湖の地を賜ひ之を優遇し、又詩を賦して祖餞す、其の人と爲り此の如し、本篇乗船の二字は、是れ知章本と、吳中

煙水の區に生長したるものなるか、故に特に引て喩と爲したるなり、知章の狂態前述の如くなれば當時亦必ず酔て險を忘るゝの事ありしなるべし、即ち次句の形容する所、是れなり、知章の馬に乗して行く醉態搖兀として宛然として船に乗するが如く、其の危険言ふばかりなし、然るに知章は全然として知らず、酔意得たり、若し彼をして一たび眼花し、誤つて路旁の井中に落るの事あらしむるも、想ふに彼は猶ほ醒悟せずして、其の水底に酣眠するなるべし、酔態の妙形容し得て眞に逼れり、然るに古來の注家多く此の句を實にし、或は其の善く馬に乗せざるを嘲るなりと云ひ、或は眞に井に落ちて自から知らざりし事ありしなりと云ふ、皆な卑陋の見のみ、

汝陽は唐の宗室にして名は雉、汝陽王に封せらる、史に其の賀知章等と詩酒の交たりしを記するを見れば、想ふに其の身は宗室の貴なり

と雖其の性散誕にして専ら詩酒に放浪したりしものと見ゆたり道逢麴車口流涎頗る滑稽に涉れども酒に於て篤嗜あるを見る汝陽郡王たるを以て筆に随つて移封酒泉の事に及ぶ妙に關照あり羌人姚馥甚だ酒を嗜む漢の武帝擢んで、朝歌の宰と爲せしに固辭して、就かず唯日に美酒を賜て以て餘年を樂しましめんことを請ふ武帝因て之を酒泉の太守と爲すと是れ此の句の出典なり、

左相は李適之を言ふ適之は酒を飲むこと一斗にして亂れず天寶元年牛仙客に代つて左相と爲しも李林甫と合はざるが爲めに其か中傷を受け同五年に官を罷む因て親知を招きて歡飲し詩を賦して曰く避賢初罷相樂聖且銜盃爲問門前客今朝幾箇來と是れ所謂銜盃樂聖稱避賢の事なり日興とは猶ほ平日の酒興と云ふがことし興到るときは則ち酒の爲めに一日千金を抛つも惜まざるを謂ふなり

崔宗之は崔日用の子にして齊國公を襲封す則ち元と是れ豪華の公子瀟灑たる風貌酒を借つて益美玉樹臨風蓋し玉山將さに頽れんとすの語に基づきて以て美少年の醉態を狀す極めて妙なり蘇晋は本と是れ禪に耽るもの故に其の醉興を以て之を繡佛逃禪に託す逃禪なるものは醉中席を逃れ去つて坐禪するを云ふ舊註逃禪を解して破戒と爲すものあり大に非なり

李白は詩豪故に其の飲酒を寫す一斗百篇亦之を詩に繫げり白翰林に供奉し日に其の飲侶と酒市に沈飲す玄宗沈香亭に坐し白をして樂章を爲くらしめんとするに白已に醉へり因て水を以て其の面に灑がしむるに白稍起ちて筆を授き一揮して宮中行樂詞十數章を作り文成つて點を加へず所謂長安市上酒家眠は其の事實なるを知るべし又范傳正が李白の墓碑に玄宗白蓮池に宴するとき白偶之に

侍せず、皇歡既に洽ねくして、白を召し序を作らしめんとす。時に白己に翰苑中に沈酔せり、因つて高力士をして之を扶けしめ、曳て以て舟に登らしむと云ふの事實を書す。天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙は此を指すなり、此の事本と唐書の本傳に見えず、故に范が碑文は或は杜少陵が此の作に據つて其の事實を捏造したる者に非ざるやの疑あり、是を以て穿鑿のもの或は關中の人、衣襟を謂つて船と云へば、不上船とは蓋し酔後衣襟を開て天子に見ゆるを云ふと解釋せるものあり、又不上船は俗語にして執拗にして人情は順はざるを云ふと爲すものあり、紛々たる聚訟、徒らに枝葉の談を滋す、本篇に於ては原來痛痒を感ずるとなし、趙次公が如きは太白已に扶けられて舟に登る、則ち船に上らずと云ふの理なきを駁せり、是れ直ちに兒童の見のみ、天子之を呼んで船に上らず、正さに扶曳せられて舟に登る極めて其

の酒狂を狀するなり、豈に竟に全く船に上らずとして解せんや、凡そ此等皆な箋注家の陋習にして詞を以て意を害するものと云ふべきのみ、

張旭は草書を以て名を知らる、其の酒興方さに酣はなるに當つては頭髮を以て水墨中に濡らし之を書す、醒めて後自から視る亦以て神異なりと爲す、故に草聖の目あり、同時の詩人李頎が旭に贈るの詩にも亦露頂據胡床、長叫三四聲の句あり、脱帽露頂は全く旭が平日の常態にして、王侯の前と雖、少こしも檢束する所なし、舊唐書の傳に稱す旭醉後號呼し、狂走して筆を索め揮灑す、變化無窮なり、殆んど神助あるが如しと、是れ亦以て「落紙雲煙」の一句の虛ならざるを證すべきなり、

焦遂は其の姓氏唐書に具はらず、唯甘澤謠に陶峴なるもの開元中崑

山に居り自から三舟を製し日に其の賓客孟彦深孟雲卿及び布衣焦
遂と之に乗して山水の間に優游すと云へるの記事あるのみ、則ち
其の飲に豪にして五斗を盡くすも仍は卓然として自若、一たび口を
開けば高談雄辯以て四筵を驚かすに足ると云ふもの、少陵が此の一
篇を借りて始めて詩仙草聖と並傳す、凡そ少陵が詩は是れ一部、の歴
史、此般高人の逸事と雖亦此を藉つて始めて傳ふるものあり、其の今
に至るまで推して千古の詩聖と爲す亦宜べならずや、或は唐史拾遺
と云へる書に焦遂本と口吃にして言語に艱むも酒を飲めば千言流
るゝが如しと云へる事實ありと注するものあり、捏造の説信を置く
に足らざるなり、

哀江頭

少陵野老吞聲哭。春日潛行曲江曲。江頭宮殿鎖千門。細柳

新蒲爲誰綠。憶昔霓旌下南苑。苑中萬物生顏色。昭陽殿裏
第一人。同輦隨君侍君側。輦前才人帶弓箭。白馬嚼嚙黃金
勒。翻身向天仰射雲。一箭正墮雙飛翼。明眸皓齒今何在。血
汚遊魂歸不得。清渭東流劍閣深。去住彼此無消息。人生有
情淚。霑臆江水江花豈終極。黃昏胡騎塵滿城。欲往城南忘
南北。

漁陽の鼓聲一たび地を動かし來つて、長安の繁華頓に舊觀に非ず、明
皇蜀に幸し貴妃馬嵬に縊れ、昔日の帝闕は化して賊營と爲り、而して
少陵亦其の中に陥り、輒やく身を脱する能はず、形を潛み、寇を避け、
目に觸れ、懷を傷ましむ、是れ哀江頭の作くる所以なり、黃鶴本の注に
詩意は本と貴妃を哀しむ、然れども敢て斥言せず、江頭行幸の處を借
つて標して題目とすと云ふ、錢謙益沈德潛亦多く此の説に従へり、余

を以て観るときは此の詩俯仰悲傷の中、偶一たび貴妃が事に及ぶは、其の事固より哀傷すべきもの一なるを以てなり、然れども詩の大段は全く獨り貴妃を哀むのみにあらず、唐運不幸にして殆んど覆滅の禍に遭を悲しみ、以て自家が忠愛の情、憂戚の志を寫すに在るのみ、宋の蘇子由は則ち曰はく、哀江頭は是れ長恨歌なりと、夫れ長恨歌の明皇貴妃が事を詳述せるは是れ皆な事後追叙の想像に出づるのみ、此の篇の躬其の境に當り、眼其の事を見るものと、未だ同日にして語るべからざるものあり、子由が言も亦未だ允當と云ふを得ざるなり、曰はく、人生情あり、涙臆を沾すと、此の涙即ち諸葛亮が出師の表を讀むの涙と一般之を讀んで感動せざるものは殆んど忠臣に非ざるなり、

少陵原は長安縣の南四十里に在り、當時杜甫亂を避けて此に居る、終

に以て號と爲せり、曲江は即ち樂游原の地、明皇屢貴妃と共に此に幸す、而して今は盡く賊塵を蒙れり、少陵の野老の潜行して聲を呑み、敢て放聲慟哭せざる所以の者、洵とに亦賊に知覺せられんことを懼るればなり、「吞聲」潜行の四字當時賊勢猶は猖獗にして人心益々恟懼し、日に生を安んぜざるの情狀を傳出す、江頭の宮殿は亂を経て猶は存すと雖、千門は皆な閑焉として鎖し、細柳新蒲は春に逢ふて再び生ずと雖、畢竟誰が爲めに綠なるを知らず、二句俱に主なきを悲しむなり、因て憶ふ開元全盛の年、霓旌屢々此の曲江の南苑に下り、苑中の萬物爲めに顔色を生せざるはなかりき、是れ多くは昭陽殿裏第一、人たる楊貴妃の常ねに天子と輦を同ふし、寸歩も君の側を去らざりしに依るなり、南苑は即ち芙蓉苑なり、時に于て忽ち一才人の腰に弓箭を帯び、黃金勒を轡ましめたるの白馬に乗じ、翩然として玉輦の前に

馳せ出づるあり才人とは宮娥の名稱なり此の宮娥即ち身を翻へして天に向ひ仰で雲際を射れば一箭正に悞たずして巧みに空中の雙飛翼を射墜せしめたり此の事當時に在ては偶々明皇と貴妃とが輦中の一笑を博せしに過ぎざりしが今日より之を觀れば一箭にして雙翼を貫きたるは寧ろ明星貴妃が慘訣の讖を成したるに非ざる無きを得んや此の意之を句中に藏して肯て言表に露はさず含蓄藉人をして味を尋ね盡さざらしむ當時の明眸皓齒今は果して何れにか在る馬嵬坡下血游魂を汚がす則ち魂亦血汚の爲めに天に歸る能はず長く游魂となりて宙宇に彷徨せるなるべし渭川の水は東に流れて回らず斯れ貴妃か自盡の處劍閣の山は深くして攀ち難し斯れ明皇が行幸の地去るもの住まるもの一生一死彼此俱に杳然として消息なし之を見之を聞く人生有情のもの誰れか涙の臆を霑

さいるものあらん此の恨の千古に茫茫たる實に江水江花の終極する所なきが如し是れ少陵の野老が春日曲江に潜行して一派辛酸の涙を禁遏し難き所以なり沈吟感歎の餘日將さに黄昏ならんとするを覺ゆす忽ち滿城に塵煙の漲れるを見る是れ胡騎の賊兵四方に散在せるもの各其の營に歸るなり是に於て倉皇として城南の我が家に往かんと欲するも心亂れ眼瞶みて殆んど南北を忘るに至れり悲哀填胸の人忽ち驚惶して措く所を知らず其の情狀眞に此の如きものあるべきなり

結二語は首句の吞聲潜行に應じ避賊蒼黃の態を寫す然れども其中又悲痛の爲めに心目迷亂せるの意を傳ふ専ら賊を避け死を畏るゝが爲めに非ざるを知るべし一層の意を兩層と做して見る即ち善讀の者の秘訣なり

「細柳新蒲爲誰綠」苑中萬物生顏色「一衰一盛反映して、姿を生ず、江水江花豈終極」に至つては又暗に之と相首尾せり、自然の章法學んで到る所にあらず

「同輩隨君侍君側」同隨侍皆な是れ一意、楊昇庵謂つて重複とし、沈歸愚又極めて之を辨護す、要するに此等の字句は本題の注目すべき所にあらず、置て問はざるを可とす、欲往城南忘南北下三字或は望城北に作り、或は忘城北に作る、其意皆な通じて、而して「忘南北」に作るもの尤も心慌意亂の態を得たり、故に之に従ふ、

此の篇は一韻到底格の仄聲に倚れるものなり、律調に仄聲を用ゆるものなきは此より前き屢之を言へり、故に問多く律句を用ゆるを妨げず、然れども大抵亦其の第二字と第五字とに於て關振を爲せり、即ち其の調の律と否とに關なく、上句第二字仄を用ゆれば下句平を用ゆる、上句平なれば下句は仄を用ゆ、第五字亦此の例に準ず、一句中二五の兩處共に此に據る固より可、一ヶ處のみ此例に従ふも亦不可なるなし、

韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖引

國初以來畫鞍馬神妙獨數江都王將軍得名三十載人間
又見眞乘黃曾貌先帝照夜白龍池十日飛霹靂內府殷紅
瑪瑙盤婕妤傳詔才人索盤賜將軍拜舞歸輕紈細綺相追
飛貴戚權門得筆跡始覺屏障生光輝晉日太宗拳毛騮近
時郭家獅子花今之新圖有二馬復令識者久嘆嗟此皆騎
戰一敵萬縞素漠漠開風沙其餘七匹亦殊絕迥若寒空動
烟雪霜蹄蹴踏長楸間馬官廝養森成列可憐九馬爭神駿
願視清高氣深穩借問苦心愛者誰後有韋諷前支遁憶昔

巡幸新豐宮。翠華拂天來向東。騰驤磊落三萬匹。皆與此圖筋骨同。自從獻寶朝河宗。無復射蛟江水中。君不見金粟堆前松柏裏。龍媒去盡鳥呼風。

少陵身は興衰を歴て時に感し事を撫す其の胸中常に一幅の痛涙あり況や此の詩を作るの時は玄宗既に崩じて南内寂寞たるの時なれば曹將軍が畫馬を見るに付けても攀髯の慟自から禁する能はず是れ起手に於て先づ先帝が照夜白の事を以て叙し入り末段の感慨の爲めに其の烘托を成す所以中段に至りて始めて現時見る所の九馬の圖を寫す其の文法又錯綜して跌宕なり故に題面より云へば中間の九馬は是れ主にして先後は之が陪だり作詩の本意より云へば偶之に反し先後は主にして九馬は陪たり此等の作法乾隆御批の所謂浩浩落落獨往獨來して神龍の霄に在る如く連蜷變化方物すべ

からざるものなり

國初以來畫鞍馬より始覺屏障生光輝に至る是を第一段とす未だ本題に至らざる前に於て豫め曹將軍が畫手の凡流に同しからず曾つて先帝玄宗の寵を承けて賞賜を拜し盛名一時を動かしたるを云ふ我が唐朝開國より以來鞍馬を畫きて能く神妙の域に達し得たるものは首として獨り太宗が猶子たる江都王讓を數ふ之に亞で興るものは即ち曹將軍なり故に將軍の畫馬に名を得たる茲に三十歳人間再び又眞の乘黃の名馬を見ることを得たり乘黃は穆王八駿の一穆王之を鞭つて八荒の外を周遊す穆王が事末段の感慨に於て借つて玄宗が仙逝の事を形す故に豫め其の一筆を伏せるなり爰に將軍が名を得たる所以の一例を挙げんに曾つて先帝玄宗天子に召し出されて先帝が愛馬たる照夜白を寫生したることあり其畫即ち眞

に、逼りて、殆んど造化の工を奪しかば、天地も之が爲めに感動し、南薰殿の側らなる龍池の蛟龍雲を興こし、霹靂の雷聲轟き渡りて十日許が程は鳴りも息さりし、玄宗特の外の御感ありて、婕好をして御旨を傳へさせられ、内府の器物を保管せる才人をして殊に秘藏の紅瑪瑙盤を索り出させ、當坐の引出物として賜はりければ、將軍拜舞して恩を謝し罷り出ぬ。此の事一たび世に流傳してより、貴戚權門の人々など如何にもして將軍が一筆を得ばやど、輕統細綺種々の珍品を贈りて筆資とし、書を乞ふもの相追つて、飛ぶが如し、洵とに其の聲價の一時に盛なりしこと、彼の貴戚權門の如きも、將軍が筆跡なくば、屏障に光彩なきを覺ゆるに至りしなり。以上將軍が盛事を以て、未幅の衰事に應ず、是れ本題の發端なり。照夜白は玄宗常乗の名馬、龍池十日飛霹靂は畫の眞に逼まるを形容するの詞、唐の六典の注に龍池は興慶

の東南薰殿の北にあり、常に雲氣あり、其の上を蔽ふ、或は黃龍の其中より出づるを見るにあり、龍は馬の神聖なるもの故に、特に之を用ひたるなり。

「昔日太宗拳毛騮」より、後有韋諷前支遁に至る、是れ第二段、韋諷錄事宅に見る所の畫馬の圖を寫す、是れ本題の正文なり、畫く所の馬凡そ九匹、先づ其の殊に勝れたるもの二匹より筆を興こし、次ぎに餘の七馬を帶叙し、然かる後又之を合提して「九馬爭神駿」と云ふ、筆に變化ありて、語語離奇を極め、少しも懈弛する所なし、今此の圖を見るに、首として人目を惹くものは、昔日太宗が劉黑闥親征の際に乘用せられしと云ふ拳毛騮、又たは近時の郭子儀將軍が中原回復の功に依りて朝廷より賜ひしと傳ふる獅子花、此の二名馬の其の中に雜はれるあれば、其の實物を識る所のもの、即ち、我少陵の如きも、之を見ては、稍暫ら

くは、嗟嘆の聲を止むる能はざりし、何となれば此の二馬は本と騎戦に用ゆべきものにして、一たび戦場に臨みては一にして萬に敵するの逸物たり、然るに此の圖の工妙なる寫して之を縞素の表に上すに宛から風沙漠々の戦場を茲に開き出したるが如く、二馬陣に臨むの狀生動して躍然たり、嗟賞せざらんと欲するも得べからざればなり其の餘の七匹も亦皆な殊絶にして一凡相なく、其の迥然として整列せる態は寒空に煙雪を動かすに異ならず、意態凜然たるを形容するなり、霜蹄の狀は皆な蹴踏して生氣あり、旁らに一帶の長林楸を畫く、其の間には馬官の馭者、所養の馬丁等皆な森然として列を成せるの態を點綴す、畫面繪がく所のもの、此に止まれり、而して右の九馬が各、神駿を爭ふの意氣自から筆端に露れ然かも皆な顧視清高にして少しも躁急の風なく、落付濟まして深穩なるの形狀着々神に入れり、是

れ良工が尤も苦心の處、然れども之を賞識して其の苦心を愛鑒するものなくんば、匠心の苦も亦徒勞に屬せんとす、因て問はん果して之を愛するものは誰ぞやと、曰はく前には則はち晋の支遁數匹の名馬を養ふて其の神駿を愛重するあり、後には則はち今代の韋諷錄事此の畫を寶愛して其の苦心を賞識するあり、曹將軍が一段の意匠、此の知己を得て庶幾くは遺憾なけん、補筆を以て重きを畫の主人に歸す、是れ詩の體裁上、其の題目に對して必ず欠くべからざるものなり、〔縞素漠漠開風沙、縞素の白紙風沙の慘色相映帶して光彩異常なり〕可憐九馬爭神駿、可憐の字凡そ三義あり、一は可愛の義、一は可憫の義、而して一は嘲弄の意を兼ね、此の句の可憐は可愛の義を取りたるものにして他の二義とは相渉らざるものと知るべし、

〔憶昔巡幸新豐宮〕より末句に至る是れ第三段、玄宗盛時の三萬匹に借

りて前二段を收束し玄宗崩後百事皆な敬むの感に入りて結とす、是れ本題の餘意にして實は作詩の本旨なり、憶ふ昔かし先帝在位の時屢、驪山の麓なる新豊宮へ行幸の事ありしが、當時翠華の旌旗天を拂ふて來つて此の京東なる驪山に向ふや、玄宗は殊の外愛馬の嗜好ある君なりしかば御厩の中に飼養せらるゝ三萬匹の名馬、亦皆を蹕に厩し儀仗を正して隨へりき、即はち前段の曹將軍が曾つて貌したりしと云ふの照夜白も亦此の中に在るなり、其の馬匹の騰驤磊落にして雄姿風を生ずるは殆んど亦此の畫中九駿の筋骨と異なる所なかりしなり、一句第一段に應し一句第二段を束す、筆力縮牛の如し、以下は專はら感慨を述ぶ、獻寶河宗は穆王の故事、射蛟江水は漢武の故事、借つて以て玄宗の崩御を言ふ、妙は穆王漢武亦皆な愛馬の帝王たるにあり、穆王八駿に乗して西域を周遊し河伯の寶玉を獻ずるを承け

歸つて終に上昇す、玄宗の升遐は「自從」の二字より寫し出されたり、漢武大宛の名馬を得、更らに東海の三神山に遊ばんと欲し、潯陽より江に浮んで蛟を江中に射る、無復の二字玄宗既に崩じて復た游幸の事なきを言ふ、則はち此の兩箇の帝王の故事「自從」「無復」の兩虚字に依りて運化せられ、總て玄宗が崩御の事と爲りしなり、故事を使用するの法、虚字を用ゐて活動するの法、皆な此の中にあり、而して蛟の字暗に又龍馬と關照あり、一字不苟と稱すべし、金粟堆は玄宗が陵墓の在るところ、玄宗親ら五陵を拜して睿宗が橋陵に至り、金粟山の虎踞龍盤の勢あるを見て侍臣に謂つて曰く、吾れ千秋萬歳の後願くは此に葬らんと、故に其の崩逝に及びて遺旨に遵ひ是を陵地と定めたるなり、龍媒は天馬を謂ふ、馬の駿なるものは以て飛龍登天の媒と爲すべきものなりとの意にして漢武が天馬徠の歌に見えたり、一たび先帝の

升。遐。あり。し。より。新。豐。游。幸。の。盛。の。復。た。見。る。べ。か。ら。さ。る。は。論。な。く。則。は。ち。騰。驤。磊。落。た。る。彼。の。三。萬。匹。の。駿。馬。の。如。き。も。殆。ん。ど。皆。な。四。散。し。盡。く。し。て。唯。金。粟。山。頭。一。堆。の。陵。墓。松。柏。四。も。に。圍。ん。で。鬱。蒼。た。る。の。中。無。數。の。鳥。雀。の。風。に。呼。ん。で。悲。鳴。す。る。を。餘。す。の。み。盛。衰。の。感。惻。焉。と。し。て。人。を。動。か。す。乃。は。ち。偶。書。馬。を。觀。て。興。念。し。て。此。に。及。ふ。其。の。一。飯。君。を。忘。れ。ざ。る。の。處。豈。に。少。陵。が。至。性。に。あ。ら。ず。や。

通篇平韻の處亦多く律句を避け其の第五字を拘するもの比々とし
て皆な是なり而して結の二句特り律調に倚るものは通首蒼莽歷落
にして音節皆な淋漓頓挫を極めたれば收束の處は轉深穩平妥の調
に倚りたる方悽婉感愴の意を深からしむるもの更らに一層なるか
故なり結已に律句を用ゆ則はち之に應ずるの音節なかるべからず
盤賜將軍拜舞歸復令識者久歎嗟此の二句即はち是れなり韻法四句

一解を用ゆるもの凡そ五處其の中間に忽ち六句一解を挿む故に結
段に到りて更らに八句一解を用ゆ又一長句を加へて之が衝を持せ
しめたり音節と詩意とは必ずしも相渉らざるものなれども又幾分
か詩意の如何に由りて音節の變化を致さるべからざるものある
は免かる可からざるの理なり此等を玩味せば自から得る所あり亦
何ぞ必ずしも支那音を學ばざれば能はずと謂はんや

丹青引贈曹將軍霸

將。軍。魏。武。之。子。孫。於。今。爲。庶。爲。清。門。英。雄。割。據。雖。已。矣。文。采。
風。流。猶。尙。存。學。書。初。學。衛。夫。人。但。恨。無。過。王。右。軍。丹。青。不。知。
老。將。至。富。貴。於。我。如。浮。雲。開。元。之。中。常。引。見。承。恩。數。上。南。薰。
殿。凌。煙。功。臣。少。顏。色。將。軍。下。筆。開。生。面。良。相。頭。上。進。賢。冠。猛。
將。腰。間。大。羽。箭。褒。公。鄂。公。毛。髮。動。英。姿。颯。爽。來。酣。戰。先。帝。天。

馬。玉。花。驄。畫。工。如。山。貌。不。同。是。日。牽。來。赤。墀。下。迴。立。闔。闔。生。
長。風。詔。謂。將。軍。拂。絹。素。意。匠。慘。澹。經。營。中。斯。須。九。重。眞。龍。出。
一。洗。萬。古。凡。馬。空。玉。花。卻。在。御。榻。上。榻。上。庭。前。屹。相。向。至。尊。
含。笑。催。賜。金。圜。人。太。僕。皆。惆。悵。弟。子。韓。幹。早。入。室。亦。能。畫。馬。
窮。殊。相。幹。惟。畫。肉。不。畫。骨。忍。使。驂。驪。氣。凋。喪。將。軍。善。畫。盖。有。
神。必。逢。佳。士。亦。寫。眞。即。今。漂。泊。干。戈。際。屢。貌。尋。常。行。路。人。途。
窮。反。遭。俗。眼。白。世。上。未。有。如。公。貧。但。看。古。來。盛。名。下。終。日。坎。
瘼。纏。其。身。

前首は曹將軍が畫馬に就て宗國の衰替を悲しむ此の篇は時勢の變遷に依つて曹將軍が遭際を傷み并せて自家の境遇に及べり立言用意俱りに截然として別なり然とも題して丹青引と云ふ故に自來の注家多く題畫の作となして解すれども其實意を用ゆる所は贈曹將

軍覇と云へるの一邊にあり中間畫人畫馬の兩段は即ち以て今日の遭遇の悲しむべきに反照したるの筆のみ此の篇は通篇八句を以て一解とし而して其の一解適以て拆して一段と爲すべし因て仍は前例に従ひ五解を分つて五段とし之が評釋を試みんとす
第一解は曹將軍が家世と其の丹青に工みなるを總叙す名畫記に據れば曹覇は魏の曹髦の後髦は曹操の族人にして其の畫魏代に稱せらる則ち曹將軍が譜牒は魏の曹操より出でたり故に將軍は魏武の子孫なりと曰ふ今日に在つては固より庶民の籍に入れども魏代の王孫たるを以ての故に清門を以て推されたり乃祖曹操が英雄割據の世に乗して帝王の尊位に登りしが如きは固より今日に望む所にあらざれども其の文彩風流の一點に到りては今に到りて猶は乃孫即ち將軍が身上に存し千萬人の稱羨して已まざる所なり英

雄割據の句魏武を收束して一邊に排し去り文彩風流を以て下文無數の丹青の能事を開き出す文勢開闔の妙を極めたり此の曹將軍初め衛夫人が書格に導ひて書を學ひしが其の到底彼の王右軍義之に超過すること能はざるを悟り乃はち翻然として書を廢して書を學び一身を以て之を丹青の繪事に委ね兀々として倦むことなく老の將さに至らんとするを知らず則はち人の得て以て榮とする所の富貴の如きは我に於ては視て浮雲となし少くも心頭に掛くる如きことあらざりし是れ即はち將軍の繪事の百世に超出する所以にして而して亦實に今日の窮途の歎あるを致す所以なり一句にして兩意直ちに照らして結語に到る是れ此の解は全首の總冒たるが故にして文心の緻密なるを見るべし

二三四の三解は皆な將軍が丹青を寫す而して二解は其の功臣を畫

くを云ひ三四の二解は其の馬を畫くを云ふ是れ畫馬は將軍が尤も得意の絕技たるを以て特に之を二段に分寫したるなり題面より言ふときは此の三解即はち丹青引の正文なり名畫記に曹霸開天の間詔を奉して御馬及び功臣を畫かき官左武衛將軍に至るとあり則はち本文の言ふ所皆な實録にして一假構なきなり開元の中常ねに引見せられ天子知遇の恩を辱して屢南内なる南薰殿に召し出されき是より先き貞觀十七年に當りて太宗皇帝當時の畫手閻立本に詔して開國功臣の圖二十四禎を凌煙閣の上に畫かしめられしか年代を経るに隨つて其の顔色も次第に磨滅し今は甚だ見るに足らざるものと爲りたるに依り玄宗乃はち更らに曹將軍に詔ありて再び之を畫かしめられしが將軍一たび筆を下して頓に生面を改め閻立本が舊圖に較ぶれば一段立勝りたるの觀を生じたり今其の一端を舉ぐ

れば彼の良相猛將の丰神皆な生氣あるのみならず其の頭上に載けるの進賢冠又は腰間に帯べるの大羽箭孰れも各其の人に依りて巧みに配置し一物の末も肯て輕忽に筆を下せるものなし特に褒公の段志玄鄂公の尉遲敬徳俱に是れ百戰の功あるものなれば其の英姿颯爽として毛髪も將さに動かんとする如く宛から褒鄂二公が眞に彼の酣戰場より歸へり來りて其許に長立するかと疑ふ其の畫の眞に逼るを謂ふなり以上是れ一段專はら畫人を寫す其の中前四句は是れ總提後四句は是れ其の畫く所のものを分寫抽寫す將軍下筆開生面の一句之れが骨子なり

其の次に畫馬に及ふ先帝玄宗天子が愛養の馬前詩に述べたる照夜白の外又玉花驄と名つくるものあり玄宗會つて許多の畫工を召して其の狀を寫さしめられたれども此の馬本と凡庸の馬に非され

ば固より尋常の畫工の其の萬一を彷彿し得らるべきものにあらざば「如山」とは畫工の衆多なるを謂ふ「貌不同」則はち其の寫す所一も能く眞に逼りたるものなきなり是の日將軍既に召れて君側にあり玄宗特に命じて此の馬を赤墀の下に牽き來らしめしが洵どに名馬の聞に高くして彼の衆畫工の貌し得ざりしも道理其の迥然として獨立せるに當つてはさしも森嚴なる閭闔の天門亦之が爲めに長風を生ずるの想あり帝乃はち將軍を顧みて速かに此の馬を寫生せよと詔あり將軍因つて謹んで絹素を拂ひ靜かに其の狀を注視し先づ意匠を凝して慘澹經營し然る後筆を把つて之を畫くに須臾の間にして九重御愛の眞龍馬は目前に畫かき出され萬古の凡馬は一洗して盡くされたり則はち其の畫手の超妙にして衆多如山の畫工を一掃し盡くせるもの言表に躍々たるなり以上又是れ一段迥立閭闔生長風

「洗萬古几馬空句々殆んど畫の神理を奪ふ其の技曹將軍の畫に較べて斷として遜色あるなし斯れ將た少陵が意匠慘澹の工に非ずして何ぞや

次段仍は前段を承けて一氣説下し視するに其の弟子韓幹が畫筆を以てし益將軍が畫の獨得にして及ぶべからざるを形はし出せり玉花却在御榻上とは將軍畫既に成り之を御榻の上に献じて天覽を請へるに依り之を言ふ然るに畫手眞を奪ふの極り殆んど一時其の榻上にあるものと庭前にあるものと孰れが畫にして孰れが眞なるやを迷はしめ只兩箇の玉花驄が屹然として相向ふて立かど訝らしむ故に至尊の感賞殊に深かくて片頬に笑を含ませられ其の賞として黄金若干を賜ひしかば彼の眞の玉花驄を牽きもて來りし圜人太僕の主馬官達之を見て羨み思ふの餘り皆な惆悵の色あるに至れり將

軍に弟子あり韓幹と曰ふ早やく將軍が入室の弟子を以て世に知らる彼も亦畫馬に於ては將軍を除く外其の匹敵なく能く馬の殊相を窮めて折して毫芒に入ると稱す然れども幹は惟皮相を畫くに工みにして未だ其の神骨を畫かき出す能はず故に彼をして驂驪の名馬を畫かしむるときは皮相の眞を寫せども動もすれば其の氣態を凋喪せしむるの患あり是れ將軍の畫馬を推して古今獨歩と爲す所以なり忍使驂驪氣凋喪極めて名馬の畫き難きを言ひ以て將軍の妙を形す故らに韓幹を貶するに非ず乃ち尊題の法にして詩體自から然らざるを得ざるなり

以上三解分つて三段と爲すも亦可視て一段と爲すも固より不可なし三解を通じて皆な將軍が知遇を先帝に得て其畫一時に貴まれしを云ふ篇首に所謂文采風流猶尙存の一句其の冒する所實に此に到

つて止まれり以下は結段今昔時を異にし榮枯地を易ふるの感に入る即ち猶ほ篇首の干今爲庶の意なり

將軍善畫蓋有神一句前三解を總束す弟子韓幹と雖も及ぶ能はざるものは蓋し即ち神あるが爲めのみ偶逢佳士亦寫眞是れ補叙の筆將軍の畫固より天子の命を奉じて之を寫すに止まらず偶佳士に逢へば亦之が囑托に應じて其の眞影を寫すことありき然れども是れ仍ほ佳士なり而して又偶一たび之を爲すのみ今は則ち之に異なり開元全盛の世は忽ち變じて賊胡侵闕の禍を致せしより天子塵を蒙りて社稷も亦殆んど危うし是に於て乎將軍も亦干戈の間に飄泊し一寒骨に徹して屢尋常行路の人を貌し以て糊口の資と爲すに至る夫れ凌煙功臣の像を畫くの筆を以て尋常行路の人を貌せざるを得ず是れ其の事寧ろ問ふ可き乎注家謂ふ疑ふらくは當時將軍少陵

の爲めに寫照す故に此の句あるならん或は當さに然かるべし人窮途に在れば必ず俗人の白眼を蒙る況や將軍素日より富貴を視ること浮雲の如くなりしを以て益俗人に容れられず以て今日の貧あるを致す詢とに己むを得ざるなり然れども古來盛名を享受するものは多くは天の憎む所となり坎壞軼軻凡そ人生の不幸薄命を其の一身に纏擾して以て終る嗚乎豈に獨り將軍のみならずや末の二語自から作者自家の悲慨を其の中に寓す沈痛哽噎人をして仰視するを得ざらしむ沈歸愚は能く其の妙を賛歎することなしと謂ふ我も亦何の語を以て之を評すべきやを知らざるなり

邯鄲少年行

高適

邯鄲城南遊俠子自矜生長邯鄲裏千場縱博家仍富幾處報讐身不死宅中歌笑日紛紛門外車馬如雲屯未知肝膽

向誰是令人却憶平原君君不見今人交態薄黃金用盡還
踈索以茲感歎辭舊遊更於時事無所求且與少年飲美酒
往來射獵西山頭

高適少くして性甚だ磊落小節に拘せず當科に預るを耻ぢて跡を博
徒に混すと云ふ此の篇想ふに其の少作にして一肚皮時宜に合はざ
るの概を見る後ち哥舒翰の幕に參して掌書記と爲り終に一擢して
諫議大夫に任ず氣を負ひ敢言し權貴を避けず時宰爲めに例目す適
が天性蓋し是の如し彼の歌吹臺上に置酒悲歌して少陵太白と比肩
唱和の豪興を極めたる固より偶然に非ざるなり茲の詩起二解專は
ら邯鄲少年を述ぶ邯鄲は趙の地故に平原君を出す未知肝膽向誰是
令人却憶平原君英氣稜稜として眉宇より溢出するを覺ふ李長吉が
買絲繡作平原君有酒惟澆趙州土彼れ奇癖の語を成すと雖其の實其

の胎を本篇に取るなり君不見以下端を改め自家の感胸中より寫し
出す今人の交態金あれば則ち密厚にして金なければ則ち踈索
す索は索莫の索なり滔々たる黄金の世界風俗日に下り寧ろ游俠縦
博の少年の快濶にして義氣あるに如かす是れ有心の者の長太息せ
ざる可からざる所我れ已に時事に於て求むる所なし且つ此等の少
年と日に美酒を飲み西山に射獵して似て磊塊を慰めんのみ以茲感
歎辭舊遊舊遊盡く是れ黄金の交一も契合するに足るなきを見るな
り且與少年飲美酒一且字下し得て味あり蓋し游俠の少年固より是
れ博奕の徒士君子の已むを得ずして之と交はるものは風俗の澆汚
なるか故のみ箇中妙に身分を存す是れ游蕩度なきものに非ざるな
り

人日寄杜二拾遺

人日題詩寄草堂。遙憐故人恩。故鄉柳條弄。色不忍見。梅花滿枝空。斷腸身在南藩。無所預。心懷百憂。復千慮。今年人日空相憶。明年人日知何處。一臥東山三十春。豈知書劍老風塵。龍鐘還忝二千石。愧爾東西南北人。

高適既に諫官を爲る氣節を負ふて直言し忌憚する所なし宰相李輔國陰に其の才を忌む適蜀に徐知道の亂あり輔國因て適を出して蜀彭二州の刺史と爲す是より先き杜少陵長安の賊中より逃れて鳳翔に至り肅宗に謁して左拾遺の官を拜せしも亦房琯を疏救するの一事に由つて罷められ秦中同谷の地を流轉して終に蜀に入り巖武に成都に依り草堂を浣花溪に築て以て居る是に至りて高適既に彭州の任所に至り偶春の回へるに遭ひ乃ち此詩を賦して以て少陵に寄せしなり高杜二人契合の深きは杜集中送高三十五書記十五韻以

下屢之を吟詠に形したるものあるに見て推知すべし柳條の色を弄し梅花の枝に滿つるは正さに是れ早春の光景平時に在つては賞心樂事漸やく將さに多からんとするの時而して身天涯に謫せられ遙かに故人を憶ふ則ち柳條梅花皆な適傷神斷腸の資と爲るのみ風光駘蕩なるも羈人の眼中寔とに淒涼として見るに忍びず兩句客緒の無聊耐ゆべからざるを寫す言下黯然たり然れども此れ猶は彼我を總稱す我れ己に此の如し料るに杜二の草堂亦當さに然かるべしとの意切に彼若くは我の各一邊の光景に黏して解する勿れ身在南藩以下は専ら自家の一邊に就て寫す南藩は蜀彭の地方を指すなり身既に南藩に在つて刺史と爲る則ち碌々として公務に従事する外萬事決して念頭に預かる所なかるべきに我が心中には則ち百憂千慮交集りて實に擺布し難きものあり蓋し今年の人日は仍は此

の地に在つて空しく相憶ふも、明年の人日に至つては更に復た何の處に遷さるゝやを知らず、官跡萍踪轉徙定まりなく、到底再び相歎聚するの口あるや否を保すること能はざればなり。回顧すれば我れ未だ出仕せざるるとき東山に一臥すること三十年間、雲野鶴悠悠として自適す、豈に復た今日書劍飄零し、龍鐘衰朽の躬を以て二千石の刺史と爲り、風塵骯髒の間に老ゆるを知らんや、是れ洵とに當時の豫期せざりし所憶ふて、此に到れば我が今日の况は君が身に些の官累なく、東西南北意の如く逍遙すべからざるなきに比して、轉慙愧に堪へざるものあるなり。一臥東山の句、突然挿入無限の波瀾ありて、文筆頓に活變す。豈知書劍老風塵、兜轉頗る爽捷意、逾沈痛を極む、龍鐘の句は書劍老風塵の注脚にして、結句忽ち繳して首段の意に還へす。筆々自然にして、章法殊に密大に法とすべきものなりとす。

登古鄴城

岑參

下馬登鄴城。城空復何見。東風吹野火。暮入飛雲殿。城隅南對望。陵臺漳水東。流不復回。武帝宮中人。去盡年年春色。爲誰來。

唐の河南彰德府臨漳縣は即ち古の鄴城にして魏の曹操が都する所、望陵臺は即ち所謂銅雀臺の一名なり、操が臨終其の愛寵する所の宮娥に遺命し其の忌日ごとに帳を臺上に設け、其の中に歌吹の樂を奏して以て西陵の墳墓を望ましむ、故に此の名あり、飛雲殿蓋し亦鄴都の宮名なるべし、城空して物なく、只東風の野火を吹て飛んで壞殿に入るあるのみ、舉目凄凉回首するに堪えず、銅雀存すと雖、漳水廻らず、宮人盡く散じて春色昔の如し、着筆極めて澹澹にして而かも餘韻盡さず、傷心極りなし、聲調凄麗纏綿猶は初唐の習を脱せざるも

の子鱗の選に入るは此が爲めなり。

韋員外家花樹歌

今年花似去年好。去年人到今年老。始知人老不如花。可惜落花君莫掃。君家兄弟不可當。列卿御史尙書郎。朝回花底恒會客。花撲玉缸春酒香。

亦年年歲歲花相似。歲歲年年人不同。の意然れども三四の理趣は更に一層を進む花の惜むべきに非らず。人花に如かざるが故に惜むべきなり。是を透過一層法と曰ふ。次解韋員外家より着筆す。員外兄弟三人列卿たり御史たり尙書郎たり。即ち他人の當るべからざる所以。三人なるもの各朝より回へりて花下に歡聚し。落花繽紛の間に酒を置き客を會して以て春光を餞す。是れ眞に能く所謂る可惜の意を知れるものなり。花撲玉缸春酒香の七字。花下歡讌の狀を寫し盡くす。他人

の數十言に勝れり。而して其の中無限の樂趣あり。又無限の悲意あり。含毫逸然として一切を包羅すと謂ふべし。

此の篇前後二解。前解は劉廷芝が詩より出づ。是れ人々皆な知るところ。後解の暗に古樂府相逢狹路間の一篇より脱化して。髣髴其の趣を尺幅中に縮寫したるに至つては。識る者殆んど鮮なかるべし。因て參照として之を附録するの亦無益にあらざるを信ず。

相逢狹路間。道隘不容車。如何兩少年。挾轂問君家。君家誠易知。易知復難忘。黃金爲君門。白玉爲君堂。堂上置樽酒。作使邯鄲倡。中庭生桂樹。華燈何煌煌。兄弟兩三人。中子爲侍郎。五日一來歸。道上自生光。黃金絡馬頭。觀者滿路旁。入門時左顧。但見雙鴛鴦。鴛鴦七十二。羅列自成行。音聲何囋囋。鶴鳴東西廂。大婦織羅綺。中婦織流黃。小婦

無所作。挾瑟上高堂。丈人且安坐。調絲未遽央。
彼は定庭の樂を述べ、此は賓客の歡を言ふ、詳畧疎密同じからざるも、筆意は全く同じ、攝神換形の法、庶くは以て悟るべし。

胡笳歌送顔真卿使赴河

君不聞胡笳聲最悲。紫髯綠眼胡人吹。吹之一曲猶未了。愁殺樓蘭征戍兒。涼秋八月蕭關道。北風吹斷天山艸。崑崙山南。月欲斜。胡人向月吹胡笳。胡笳怨兮將送君。秦山遙望隴山雲。邊城夜夜多愁夢。向月胡笳誰喜聞。

開元中顔真卿監察御史を以て西域河隴の地を巡視す、嘉州故に此の送行あり、顔が事は人皆な之を知り、其の忠義の氣耿耿として、千古に照映す、今樓述に庸なし、嘉州の此の篇正面より別離の情緒を寫さずして、胡笳を借つて其の悲を寓す、其の聲調又超忽悲壯にして、巴峽の

猿聲蜀棧の鵑語の如く、人をして一聽涙下らしむるものあり、尋常送別の熟套を破つて別に新格を創しめたるものと謂ふべきなり、

胡笳は其の聲最も悲し、况んや之を吹くものは、則ち皆な紫髯綠眼の胡人なり、故に遠く萬里の塞外に征戍せるものは、此の曲を聽て未だ終らざるに、之が爲に愁殺せられざるものなし、以上一解、先づ胡笳の悲ひ可きを總提す、樓蘭は西域鄯善國の別名なり、

涼秋八月の候、是れ一年中最も悲哉の時なり、時に于て長安の北遙かに蕭關を出で、道を塞外に取る、北風栗烈として、天山の草を吹斷す、其の勢の勁厲なる知るべし、過客之に逢ふて、固より已に堪はず、况んや崑崙山南の月將さに斜ならん、とすに當り、彼の紫髯綠眼の胡人、月に向つて得意の胡笳を吹起す、誰れか廻腸百結せざるものあらんや、以上一解、未だ其の人に叙し到らざるに先づ其の地を點出し、仍ほ

胡笳の上。に歸到す。蕭關は秦の北關。長安より河隴に赴く、必ず經過すべからざるの地。故に之を用ゆ。
 最後の一解は是れ送別の正文なり。今我れ乃はち此の胡笳の怨聲を以て君が萬里の行を送らんとす。借つて以て無限離別の悲を表せんと欲すればなり。秦山は即ち蕭關の在る所。臨別の地なり。隴山は河隴の地。眞卿が將さに赴かんとするの處なり。秦山に登りて、隴山の雲を望めば蒼茫として、邊際あることなし。君は直ちに萬里を辭せずして之に赴く。邊城の裏夜々當さに愁夢多かるべきなり。時に於て乃はち彼の月に向ふの胡笳を聞く。料るに當さに復た情を爲し難きものあるべし。夫れ笳聲は固より悲。誰れか之を聞くことを喜ぶものあらんや。然りと雖。王事身に在り。我が君に望むところは能く艱を辭せず。險を憚らずして其の使命の大功を成し遂げんに在り。悲笳の爲めに

勇氣を沮喪せらるゝ。莫れ我れは寧ろ君が之を喜び聞かんことを希望するなり。誰喜聞の三字下し得て悲壯一面彼の萬里客と爲るの情緒を體諒し、一面には又其の身を王事に效さんことを勗む。七穿八透の文なり。從來解するもの此の三字を以て惟悲緒を抒ふるに過ぎずと爲す。未だ詩の眞意を得たるものとするに足らざるなり。

高適岑參は皆な盛唐の名家。年輩を以て論すれば李杜二人に比して稍先輩たり。故に高岑の聲調は初唐の氣格を變じて雄渾悲壯の一派を開らき。以て李杜二人が先驅を爲せしものなり。此に選録する所の數首は干鱗が例の辭說に由りて極めて初唐に近きものゝみを選びみ出したるなれば、二人の本色之が爲めに蔽はれたるの憾なきにあらず。然れども「登古鄴城」章員外花樹歌の二篇の純はら初唐の聲調に依りたるものを除て外は、此の篇の如き邯鄲少年行の如き、其の平韻

を○押○し○た○る○も○の○に○就○て○細○か○に○其○の○二○五○關○振○の○處○を○玩○せ○ば○盡○く○皆○な○
我○が○述○べ○た○る○所○の○音○節○に○協○は○さ○る○も○の○な○し○以○て○二○家○先○驅○の○説○の○特○
に○余○が○一○家○言○に○非○さ○る○を○知○る○べ○き○な○り○花○樹○歌○の○結○句○春○酒○香○の○春○字○
の○如○き○は○初○唐○の○調○也○雖○亦○自○然○の○音○節○に○し○て○斷○と○し○て○平○聲○を○用○ゆ○る○
に○非○さ○れ○ば○收○束○す○る○能○は○さ○る○な○り○

崔五丈圖屏風賦得烏孫佩刀 李頎

烏○孫○腰○間○佩○兩○刀○。又○可○吹○毛○錦○爲○帶○。握○中○枕○宿○穹○廬○室○。馬○上○
割○飛○蠙○螭○塞○。執○之○魍○魎○誰○能○前○。氣○漂○清○風○沙○漠○邊○。磨○用○陰○山○
一○片○玉○。洗○將○胡○地○獨○流○泉○。主○人○屏○風○寫○奇○狀○。鐵○鞞○金○環○儼○相○
向○。回○頭○瞪○目○時○一○看○。使○予○心○在○江○湖○上○。

崔五丈が家に畫屏風ありて、其の上に許多の珍器古玩を繪く、李東川
因て其の中に就き烏孫國の佩刀を詠じて此の詩を作くる、題意蓋し

此の如し、烏孫は朔北の部落、漢の時其の勢力頗る強盛なりしを以て
公主を出嫁せしめ、以て和好を通じたること、史傳に見えたり、既に題
して佩刀を曰ふ、想ふに是れ烏孫王が常用の器たるなるべし、詩前二
解先づ佩刀より叙し入り、次で其の銳利の狀を形容す、次の一解始め
て題面に入り、是れ屏風上の畫たるを提醒す、所謂畫龍點睛法を得
たるものなり、

起手は佩刀の緣起を述るのみ、則ち此の刀は烏孫國王が常に腰間
に繫帶せし所のものにして、其刀の銳鋒毛を吹て之を截つべきに足
り、其の下げ緒は錦繡を以て之を飾れり、穹廬室は天幕を謂ふ、蠙螭塞
は朔方の塞名、蠙螭は蜜蜂の細腰なるもの、塞形の險隘なるに象せり
之を名づく、此の刀は烏孫王の寶愛する所なれば、其の握中に在りて
鞞を脱せざるときは常に之を枕籍して穹廬中に宿し、又一たび之を

抜き放ちては馬上に振り翳して鬪蟾塞上を飛び廻はれり、以上此の刀の烏孫刀たるに由つて、其の縁起を推測するのみ、説くもの或は誤解して崔五丈が屏風上に烏孫王の刀を帯びて立てる状を繪きたるものなりと云ふは拘泥の説なり、

縁起已に分明なり、則ち其の銳利の状を寫す、上解の「及可吹毛」と云へる四字より分抽し出したるなり、洵とに此の刀の銳利なる之を執つて立つときは如何なる魑魅魍魎と雖も畏れて敢て前む能はじ、其の氣の凜然たる北方沙漠の地も之が爲めに清風を生ずるの想あらん、之を磨くには則ち如何、陰山の石の縝密堅緻にして玉の如きあり、之を洗ふは則ち如何、胡池の流水の清澈澄瑩にして獨流の稱あるものあり、刀の銳鋒人を射るは良とに以あるなり、曰く沙漠、曰く陰山、胡地俱に是れ烏孫刀たるに對して、襪染せるものにして、上解の穹

盧室、蟾塞皆な同一の筆意に屬す、

「主人屏風寫奇狀」七字題位に還る、鐵鞘金環は俱に刀を飾る所以のものにして、亦起手の「錦爲帶」の三字を分抽するなり、儼として相向ふとは畫く所のもの大小兩刀あるが故にして、儼は逼真の意、以て第一句に應ず、其の畫能く眞を狀する此の如くなれば、回頭瞪目して凝視すること幾回、予をして轉、江湖の上に在るの想あらしむ、江湖は猶湖海と云ふがことし、斯の如きの名劍を帯びて江湖に縱游せば、其の豪氣湖海の陳元龍を壓倒するは、易々のみ、是れ刀を視て、天下周游の想を生ずる所以なるべし、結七字頗る意表に出づ、黃山谷が出門一笑大江横の概あり、

李東川は開元中進士に擧げらる、即ち亦李杜の先輩なり、其の詩發調既に清く修辭亦秀で、一たび放浪の語を爲すときは心神を震蕩す

へきに足るの評あり其の古從軍行の一篇の如きは尤も誦すべきものにして結語年々戰骨埋荒外空見蒲桃入漢家の二句玄宗開邊の濫なるを隠指して諷刺極めて濫籍なり本篇烏孫佩刀の如き其の格は初唐に似たるも實は至れるものにあらず子鱗の選只初唐の氣格を以て標準とし餘は一切變調を以て斥けらる其の人を誤るの甚しき一に以て此に至る痛恨を爲すべし

答張五弟

王維

終南有茅屋。前對終南山。終年無客長閉關。終日無心長自閒。不妨飲酒復垂釣。君但能來相往還。

王摩詰の七古は其の騷體を用ひたるもの、外隴頭吟桃源行の諸作鑿鑿として傳ふべし李杜が大手筆の以て萬古を睥睨するものなしと雖清澹閒曠の致實に李杜が到り得べからざるものあつて存す而

して本選は則ち此の寥々たる數語を發す洵に亦砒砒燕石を抱て以て珍とし隋珠趙璧の前に在るを知らざるものなり

此の篇終の字を以て字眼とす其の體一に我國の「モヂリ文句」と稱するものに似たり是れ一時口占の作偶然興到り筆に隨つて書下したるに過ぎず亦何んぞ貴むに足らんや

然れども其の中又一種淡泊の致あり五言送別之作と恰も好一對を爲す必らず廢せざるなり張五弟名は譚永嘉の人にして少室山に隱居し摩詰の風采を慕ふて之に兄事す時に摩詰は輞川に別墅を構へ之に居る輞川は藍田縣にして終南山の麓に在り此の詩故に云ふなり終南の山下に茅屋ありて前は終南山に對す終年客なくして終日心閒なり張は我と同好あるもの故に能く來らば相往還して酒を飲み釣を垂れんのみ飲酒垂釣は終日無心の句より生じ君但能來は終

年無客の句より生ず、小小の文字亦針線あり。

一七〇

此種の詩の妙は全く天籟にして絶て斧鑿なきに在り、然れども若し誤つて其の句字より之を求むれば、興會全く没して一の平弱の調と爲る。學者此種に篤嗜あらば、決して之を學ぶ勿れとは謂はず、願はくは歩々に心を留め、切に其の興趣を忘るゝ勿れ、一韻到底にして第五字を拗すべきは己に屢云ふ所、指摘を待ずして明なるべし。

孟門行

崔 巖

黃雀銜黃花。翩翩傍簷隙。本擬報君恩。如何反彈射。金壘美酒滿。座春平原愛。才多衆賓滿。堂盡是忠義士。何意得有讒諛人。諛言反復那可道。能令君心不自保。北園新栽桃李枝。根株未固何轉移。成陰結實君自取。若問傍人那得知。

崔巖か孟門行は讒毀に遭ふを傷んで作るなり、孟門は山の名、絶て詩

中の事と相渉らず、命題の意正に、何の處に在るを知らず、或は謂ふ呂氏春秋に孟門大行不爲險矣の語あり、因て人情反覆の危険なる彼の孟門の山よりも甚しとの義に取り之を命じたるものなりと、果して然るや否を知らざれども別に創解なければ、姑らく之に従ふ、黃雀報恩は後漢楊寶が故事なり、借つて以て自己が主人に事ふるの情を興す、黃雀の黃花を銜んで翩翩として君が簷隙を窺ふものは正さに君が恩を報せんとするのみ、何を以てか却つて憎れて彈射の苦に遭ふや、自己が主人に事ふる忠誠を效すの外更に他なきに、反つて讒の爲めに斥けられしを悲む、其の喻を取る殊に婉切なり、金尊美酒以下は事ふ所の主人を云ふ、其の人才を愛する平原も嘗ならず、則ち幕客中復た讒諛の人あるべからずして、而して適之あり、讒諛の畏るべき能く此の賢主人をして心自から保たさらしむ、此の處、讒者よ

一七一

り筆を立て敢て主人を傷けず以下又更らに其意を曲喻して明言せず尤も體を得たり北園に桃李を新栽せんに其の根株未だ固からずして遽かに之を轉移せば何ぞ成陰結實の功を奏するを得ん人才を養成する亦此の如し然れども是れ主公當さに自から擇ぶ所あるべし他人の讒を容れて我をして根株動搖の悔あらしむる勿れ措詞蘊藉含蓄の妙一に前後の兩比喻に在り崔顯其人殊に取るに足るなきも李太白亦曾つて之を激賞す洵に及び易からざるものあるなり事は七律の部に詳かなり

贈喬林

張謂

去年上策不見收今年寄食仍淹留羨君有酒能便醉羨君無錢能不憂如今五侯不待客羨君不入五侯宅如今七貴方自專羨君不過七貴門丈夫會應有知己世上悠悠安足

論

傳に稱す張謂少して書を嵩山に讀み清才拔萃汎覽流觀敢て權貴に屈せずして自から奇骨に矜ると茲の篇是れ人に贈るの作と雖亦其の風概を見るに足れり

首の二句或は張自から謂ふと做して解するものあり或は喬の事を述ぶとして解するものあり細かに詩意を審するに羨君無錢能不憂の一句斷として張が喬の家に寄食淹留せしに非ざるを見る則は此の二句喬が事と做して解するもの當を得たるに庶幾し喬去年を以て上策せしも上司之を收めず終に落第したれば今年に到るも仍長安に寄食淹留して益落魄の境に沈淪せり然れども我れは甚だ君の人と爲りに慕ふことあり酒あれば輒はち酔ひ錢なきも憂へず窮達に因つて其の心を易ゆることなし古の五侯七貴は能く人才を招

納して賢者を下禮す故に之に赴くもの、雲の如きを恠しませず、今の達官貴人は之に反し皆な自尊して賓客を善待するものなし、然るに滔々たる趨炎の輩は正に笑を呈し媚を獻じて一力奉承す歎すべきの至にして而して君獨り之を爲すを屑とせず是れ我が羨むべしとする所なり、數句力を極めて喬が人と爲りを譽めて之を鼓舞し其の落魄無聊を慰む故らに放曠の觀を裝ふに非ざるなり、結二句一轉して收束す、丈夫世に出づ必ず應さに一知己あるべし、既に知己あり、則はち世上悠悠たる行路の交安んず論ずるに足らんや、張隱然知己を以て自から居る蓋し上無數の羨慕知己に非れば言ふ能はざればなり、

夜坐不厭湖上月。晝行不厭湖上山。眼前一樽又長滿。心中

萬事如等閒。主人有黍萬餘石。濁醪數斗應不惜。即今相對不盡歡。別後相思復何益。茱萸灣頭歸路賒。願君且宿黃公家。風光若此人不醉。參差辜負東園花。

張謂乾元中に尙書郎と爲り、長沙の地方を巡視し禮部侍郎に擧げられ尋て出で、潭州の刺史と爲る、此の篇蓋し潭州在任の時の作なり、性酒を嗜んで簡澹意を湖山に樂ましむ、詩意大抵及時行樂の意に過ぎざれども其の反復申言の處尤も沈快なるを覺ふ、李太白が桃李園序と並觀するに足れり、

湖山晝夜の景光留連すべきに足つて、眼前の一樽亦常に滿ちたり、即ち酒に對して以て游賞を爲すの外、心中萬事一切皆な等閒に屬す、况んや主人に萬石の黍あり、以て酒を造るに足る、樽中の濁醪數斗の如きは固より應さに惜む所にあらざるべし、何ぞ飲まざるや、今日賓

主相對するの時を趁ふて十分の歡を盡くすに非ずんば、別後に至りて相思ふとも將た何の益かあらんや、豈に茱萸灣頭の歸路除かなるが爲めに歡を終へずして去らんと欲するか、然らば且つ請ふ、黃公が家に一宿して以て今夕を永せよ、此の如きの風光を見て而して醉を成さずんば終に恐らくは參差して時に違ひ爲めに此の東園の花に辜負せんことを何ぞ留まらざるや、曰く、即今相對不盡歡、曰く、風光若此人、不醉反覆の處殊に味すべし、蓋し上句は湖景に對し、言ひ下句は花に對して言ふ、湖景は長く在れども花は則ち開謝す、是れ殊に之を重言する所以なり。

晋の王濟冲嵇阮の徒と黃公の酒壚に痛飲す、故に之を借言す、只酒あるの處と云はん迄なり。

○城傍曲

王昌齡

秋風鳴桑條。草白狐兔驕。邯鄲飲來酒未消。城北原平掣白鵬。射殺空營兩騰虎。迴身却月佩弓鞘。

城傍曲は亦是れ樂府題、此の詩専ら射獵の事を言ふ、然れども此の題義甚だ廣ければ、倣ふもの必ずしも射獵のみに泥すべからざるなり、詩意甚だ明亮なれば釋義を須らず、廻身却月佩弓鞘、却月とは半落の山月を謂ふ、少年老虎を射り罷んで意態凜然、乃ち身を廻へし、山月を背にし、弓鞘を佩んで歸る、其の豪氣猶は餘あるを見るが如し、俊爽の至なり、却月の二字正面の解は此の如くなるも裏面には以て弓狀を形容したる意ありと倣して見んことを要す。

昌齡は奇句俊格を以て稱す、箜篌謠の如き尤も雄健の作なり、此の篇は峻邁と雖仍は初唐調のみ、其の律句多きも此か爲めなり。

○洪州客舍寄柳博士芳

薛業

○去年燕巢主人屋。今年花發路傍枝。年年爲客不到舍。舊國存亡那得知。胡塵一起亂天下。何處春風無別離。

薛業其の人事跡甚だ明ならず、唯此の詩に據つて其の柳芳と同時にして天寶間の處士なるを知るのみ、胡塵の句蓋し祿山の亂を指す、何處春風無別離二句沈痛、漁陽の鞞鼓天地を震動す、則はち流離の苦獨り、我のみならず、滿地の干戈生民塗炭皆な言外にあり、

且つ中晚を言ふ勿れ、則はち盛唐の諸人七古の傳ふべきもの正に枚舉に違あらず、而して滄溟概ね節略に従ふ、此等の作の如きは固より其の最上乘に居るものにあらず、然るに仍ほ採收を蒙るものは、去年今年の語偶、大に初唐の口角に類したるが故のみ、嗚呼若し此を以て標準とせば、古詩は只去年今年等の語を用ゆれば、則はち可なるのみ、優孟の衣冠眞に一笑を發すべし、

春江花月夜

張若虛

春江潮水連海平。海上明月共潮生。滌滌隨波千萬里。何處春江無月明。江流宛轉遶芳甸。月照花林皆似霰。空裏流霜不覺飛。汀上白沙看不見。江天一色無纖塵。皎皎空中孤月輪。江畔何人初見月。江月何年初照人。人生代代無窮已。江月年年望相似。不知江月照何人。但見長江送流水。白雲一片去悠悠。青楓浦上不見愁。誰家今夜扁舟子。何處相思明月樓。可憐樓上月徘徊。應照離人粧鏡臺。玉戶簾中卷不去。攏衣砧上拂還來。此時相望不相聞。願逐月華流照君。鴻雁長飛光不度。魚龍潛躍水成文。昨夜閒潭夢落花。可憐春半不還家。江水流春去欲盡。江潭落月復西斜。斜月沈沈藏海霧。碣石瀟湘無限路。不知乘月幾人歸。落月搖情滿江樹。

此の詩を評釋するの前に於て先づ本選の年代、次序に、非常の錯亂あるを辨せざる可からず、以下三首は皆な初唐の詩なり、乃はち宜しく卷首の王勃、盧照鄰、劉廷芝が諸作と駢列すべきものにして、干鱗乃はち遙かに之を盛唐諸人の後に置く、豈に史に明文なくして、其の人の年輩終に考ふ可からざるが故か、然れば則はち駱賓王の如きは如何、王、楊、盧、駱稱して、四傑と爲す、何が故に却て之を最後に移せるや、或は駱が作は唯、鋪陳排比を旨として之を盧照鄰が長安古意に較ぶれば、冗慢厭ふべきものあるを以て、編次の序次稍之が褒貶を寓したるが、然らば則はち張若虛が此の作の如きは、蟬聯宛轉、流暢圓美、寔に劉廷芝が代白頭翁等の作の上に在り、干鱗が平生の持論、初唐を以て七古の正式と爲すより見れば、何が故に又之を移して遙かに上位に廁せしめざるや、凡そ此の一種僻謬の見常理を以て解すべからざる

ものあるなり、或は云ふ張若虛は開元中尙は生存して賀知章、包佶、張旭と吳中四士の目ありと、然れば則はち初唐より盛唐に渉るの人、駱賓王に比して又其の後にあり、序次宜しく李白、杜甫諸人の上に在るべきものとす、彼の時初唐の格調沈宋輩の爲めに益、靡弱に陥らんとす、想ふに若虛一たび其の才筆を揮ふて直ちに四傑の堂奥を衝き之を一振せんことを圖りしなるべし、然れども時勢の變遷、風氣の推移は復た苦々一格を死守することを容れず、高岑、王、李出て、大に步趨を改め、李杜に至りて、風雨分飛し、魚龍百變す、是れ年代と詩運の大略にして、若虛の才も時尙に背馳する所あるが故に多く傳はらず、僅かに茲の一篇を存す、尤も當さに寶愛すべきものなり、然れども此等の沿革は其の年代に依つて編次してこそ始めて見る者をして心に自得せしむべし、若し冠裳顛倒、其の謂なき此の如くなるときは、初學の

もの茫乎として、律に迷ふ、何に由つてか、筏を捨て、岸に登ることを得んや、是れ予が特に本書を評釋して爲めに、其の訛謬の處を摘正し、集矢の譏を受けて肯て辭せざるの一片の苦衷なり。

春江花月夜は陳の後主が荒謔の日孔都官江總等の諸狎客と俱に相唱和せし樂府辭中、特に艶麗の稱あるものなり、若虚因つて借つて題と爲し、專はら題中五字の義を演釋して、三十六句の長篇と爲したり、其の千回萬轉變化極りなくして、到底題面五字の意に歸着せるは、譬へば龍の珠を争ふが如し、雲を穿ち霧に入り、或は正或は側而して龍の睛と龜の爪とは總て珠を離れざるなり、其の大意を綜すれば、前後八句を以て一段とするもの各二段、中間白雲一片去悠悠々の四句を一段として、前後の四大段の過渡承接の所とせるなり、

首の八句一段、四句春江より説き入つて、夜月に及び月明千里、滄滄と

して千里に亘る、是れ題の春江月夜なり、江流宛轉遶芳甸、芳甸の二字漸やく説て題の花の字に至り、次句月照花林皆似霰、花月を雙提して以て題面を完うす、林花明月の照らす所と爲りて、點點として霰に似たり、形容の工妙神助あるか如し、空裏流霜不覺飛、汀上白沙看不見、又前六句を一束す、白沙流霜の飛ぶを覺えず、看て見へざるものは、都て月光の中にあればなり、霜の字上文の霰と虛實相銜む、文心細なること、髮の如し。

次八句一段、江天一色無纖塵の句、首一段を包括して、一句と爲し、皎皎空中孤月輪中に就て、獨り月を拈出して、下文感慨に入るの端と爲す、江畔何人初見月、江月何年初照人、無端に發問し、次の四句之を解釋す、而して人生代代無窮已、江月年年望相似、は月に就て人の同じからざるを歎じ、不知江月照何人、但見長江送流水、は江水に就て人の同じか